

病者 の 文 学

— 正岡子規における病いと文学 (I) —

黒

沢

勉

目 次

- 一 病氣と宗教・文学
- 二 正岡子規の生涯
- 三 その文学活動と病歴
- (1) 子規と結核——書簡にみる病歴
- (2) 子規と脊椎カリエス——第三者の証言
- (3) 子規の誕生
- (1) 様々な雅号
- (2) 「啼血始末」について
- (3) 「読書弁」について

— 病気と宗教・文学

現代のような文明社会にあって、病気について専門的に研究し病気・病人をみるのは医師である。そして一般的には医師だけであると考えられている。ところがスイスの精神科医であつたパウル＝トルリエ (Paul Tournier) は、「聖書と医学」(原題 *Bible et Médecine* 一九五一年刊) の中で次のように述べている。

「どんな病気でも一つの全く異なる次元の問題を提起していくことは明らかである。すなわち、第一は科学的问题であり、病気の性質と成り立ちについての診断、病因、病気発生についての問題である。第二は靈的な問題であつて、その病気の深い意味と目的に関する問題である。だから私達は、どの病気も二種類の診断を要求しているといふことができる。すなわち科学的な疫病学的、病理学的な診断ともう一つの靈的な病気の意味と目的についての診断とを。第一の診断は客観的なものである。このような診断を患者に行うのは私達医師だけである。第二の診断は、主観的なものである。この診断を行うのは患者自身であつて決して医師でない。患者は彼の最も奥深くにある良心の働きを通してこの診断をつけることができる。」

「第二の立場」に立てば、病気をみるのは患者自身だということになる。自分でみてわからない、治らないからこそ私達医師はみてもらうのだという常識から考えれば、これはおかしな見解であろう。又、病気と「良心」が関連しているといふのも一般には考えにくいだろう。病気を医師にみてもらうという時、それは自然科学的な立場からの診断を求めているのであって、「病気の意味や目的」「良心」などを問題にしているわけではない。しかし、現代の常識がいうように病気はあくまで「科学の問題」であつて、「靈的な問題」を提起しているなどというのは時代遅れの無知・不合理な見解・意味のない妄想にすぎないだろうか。病気を「靈的な問題」として考えるな

などと言えば、いかがわしい宗教や迷信と同列にみなされ避けられるであろう。又、科学の時代にそのような解釈をするのは愚かなことであり、「心の弱さ」以外の何ものでもないと否定され、軽蔑されがちであろう。トゥルニエの言う「靈的な問題」とは、そのような呪術的・宗教的なもの、あるいは倫理的なものをも含めて、病者自身の内面において常に問われる「病気の意味と目的」ということである。「常に」という言葉に注意して頂きたい。人によつて、時と場合によつて、ではなく「常に」なのである。これは「主観的」なこととして、科学としての医学の世界にあつては問題にされなかつた。だが医療を考える場合——医療は「ヒト」を見る場ではなく、社会的・文化的存在である「人間」を問題とせずにいられないから——重要なテーマであり、そのような面から病気を考えることも病者への援助となるはずである。トゥルニエの主張によれば病気には、それ自体の価値や意義・役割があるといふ。それは、病者が自らの苦しみを通してつかみとり、あるいは、つかみえぬままに問い合わせ続ける問題だという。だが、一般には——健康（だと思つてゐる）な人を中心とする立場から、病気は単に、人生を妨害する「惡」であり、「恐ろしいもの」、又「治すべきもの」と考えられてゐる。しかも治してくれるのは科学者としての医師である。単純化して言えばそこでは「患者」はその治療を受けるだけの受身の存在であり、時として悲しむべきあわれな弱者とみなされる。

科学——と言つても、ここで言うのは自然科学であるが——は、観察し、実験して、事物の因果関係を証明する、人間の理性の生み出した一つの学問的体系である。医学は、そのようにして得られた科学的知見を、実際に病気のために苦しんでいる人に役立てようとする応用科学であり、技術的な性格を強くもつてゐる。医学は病める、弱れる悩める人間を救おうという悲願をもとに発達してきたものである。だから医学は技術でありながら同時に、心情的・倫理的な性格を本來的に強くもつてゐる。病者への「いたわり」なき医師は單なる「技術屋」「商売人」と言つ

てもよい。「医は仁の術」と言われるゆえんである。

病者は多くの場合、身体の苦痛、異変に気づき、不安をもつて病院を訪れる。そこで医療行為が開始され、病者はその病院の「患者」となる。医師は「患者」を診察し、問診し、病名を診断し、それに応じた行為が開始される。親切な医師は、「患者」の苦しみや痛み、不安に共感を示しつつ治療行為にあたるであろう。しかし「患者」の心に共感すること、それ事体は医師にとって本質的なことではない。病者の苦しみに共感を抱き、病者と共に苦しむのは、その病者を愛する縁者である。医師は見ず知らずの病者を、その縁者の立場に立つて救済しようとするのだから医の心には「普遍的な愛」を必要とするものである。医師は愛の人であり、病める人への深い共感を抱く人でなくてはならない。このような「心」を育てるのも医学教育の重要な課題であろう。

しかし、現代の医学は、あまりに自然科学的、物質的であり、技術主義に偏していくように思われる。確かに、現代の自然科学を基礎として学ぶ医師にとって最も必要なことは、人体に関する科学的知識＝医学的知識をもちすぐれた医療技術を身につけることであろう。本来医学は患者の苦しみに端を発したにもかかわらず、科学技術中心の医療はその苦しみに共感する心を忘れ動物実験と同じように、その病気が、どのようなものか、その原因は何か、どのような治療が有効か、などと言ったレベルでのみ考えるようになる。医学者と呼ばれる人々も、このような研究に専念しているのであって、直接に苦しんでいる病者の声に耳を傾け病者の生き方を考えているわけではない。病院という苦しんでいる人々に直接接する場で、もし科学主義が貫かれるなら、病院とは「人体研究所」となり、その患者は研究者の研究対象にすぎない、ということになってしまふ。その極端な例がナチスや戦前九州大学医学部で行われたという、人体実験である。人体がどのような構造を有しているか、病気とはどのようなものか：

それらについて知りたいという科学者らしい知的好奇心は時として理性を「非情」という言葉で置きかえることができる位の「悪」を生み出してもいる。これらは極端な例ではあるが、トルニエは純粹に科学的な見地からみるなら、このような人体実験は是認される、と指摘している。科学としての医学を学び、同時に豊富な臨床経験とするぎないキリスト教信仰をもつ医師としてのトルニエの発言は、病気が自然科学的な医学の観点からのみ見られるがちな現実に反省を促し、病気のもつてゐる深い「意味」について私達の内省を促すのである。

科学的な立場からのみ「患者」を見ることは、「患者」を研究対象として見ることであり、病者という「人間」の全体像を無視する危険性をはらむことになる。科学の立場からすれば「人間」とか「人格」などというのもあやしげな観念であり、しょせんは生物としての「ヒト」にすぎないということになろう。そこでは医師は現代の進んだ医療技術を背景に病気を治してくれるこの上ない大切な存在ではあるが、患者自身は無知で、無力な、弱々しい、助けを待つだけの存在——受け身の存在となってしまう。こうして病気を科学の問題としての受けとめる時、患者の人間性や主体性はおびやかされるという結果を招きかねない。科学としての医学——その成果を認めつつも私達は、専門化された高度な科学が巨大な権威として病者を、病者の貴重な生を押しつぶしかねない面もあることに注意しなくてはなるまい。

現代医学の恩恵によつて命を救われた人は数えきれない程ある。と同時に現代医学は、この世のすべての病人を決して救済していないことも事実であろう。「父の命を奪つた癌が憎い。医学の進歩を心から期待しています」という、身内を癌のために失つた人の気持ちは切実である。癌の撲滅は世界の悲願であり、この悲願に応えるべく日夜研究にいそしむ医学者、あるいは直接癌患者に救いの手をさし伸べようとする医師の姿は尊い。だが、癌は現在のところ容易に癒しがたい。癌に限らない。この世に癒しがたい病気がどれ程あり、どれ程多くの人々が苦しんで

いるであろう。現代医学によつて救われた人々を見、その力を讃美する私達も、その反面を見るなら、現代医学があまりにも非力なものだと感じるはずである。物事には両面があり、それぞれ「正しい」といった風な結論を私達は、ここで出したくなる。だが本質的にみてどんなに文明が進歩しようと私達は病気を免れることができず、老化を避けられず、望まないにもかかわらず死を迎ねばならぬ存在である。老化や死はともかく、病気は医学の力によつて免れることができるはずだと考え、専門医の書いた病気の予防に関する本を読む、まじめに健康診断を受ける—それも大切なことではある。しかし、だからと言つて病気にからないと保証はどこにもない。健康に関する科学的知識が普及し、病気が少なくなったのかもしれないが、皮肉なことにその反面健康ノイローゼが増加している。そして酒も煙草もやり健康に無頓着な人がけつこう丈夫で長生きするかと思えば、人一倍健康に注意している人が重病に冒されたりもする。「歎異抄」の一節に自分が悪いことをしないことについて「わが心の良くてなさぬにはあらず」と言う。それと同様に誠に病気になるもならぬも「わが心」のせいではない、といった面が病氣はある。それは「己」の命が他から「己」の意志を越えたものから—授かつたごとく外からやってくる。健康でいる間は、私達はそれと意識しないが、人間存在は不安な深い間に包まれている。病気は私達にその存在の闇をかいまみさせる。病気になつたということに対しても一体どこまで本人の責任があるのか、それを判断するのは難しい。ある時代に生まれ、ある国に生まれたということがすでにその病気や死を大きく条件づけている。現在の日本人は男女とも世界最高の平均寿命（一九九一年の調査では男七六・二三才、女八二・一一才）を維持しているがアフリカのナイジェリアでは一八八五—一九〇年の調査で男四八・八二才、女五二・二三才で、実に三十才位の差がある。（「国民衛生の動向」厚生統計協会）同じ時代、國を考えても、一人一人の遺伝子が違う。病気はその遺伝子によって、ある程度条件づけられてもいる。私達がこの命・身体をさずかった時すでに病気や死というものも「己」

れの意志を越える形で用意されていた、と見るべきであろう。科学を万能視し、医学を万能視して、その知識・技術によつて病気や死を克服できるなどと考えるのは浅はかなことである。人間はこれ迄病気や死と共に生きてきたし、これからもそれは変わらないであろう。

病気や死は科学的合理主義で「片づける」とのできない深い形而上の・宗教的な「意味」をもつてゐるのではなかろうか。自ら医師であつたトゥルニエは、医師の医学的知識というものが、目に見えない恐るべき障害をもたらす恐れもあることを指摘している。それは、患者という弱者を相手にするだけに、自らが相対的には強者となり、その知識・技術を背景として、医師と患者の眞のコミュニケーションを妨げてしまう、ということである。「医師が患者と眞実の接触を確立するのは、決して科学者としてではなく彼自身、その科学的知識にもかかわらず患者と同様にみじめな被造物であると感じて、ことばの眞の意味において患者に同情している一人の人間としてのみである」とトゥルニエはいう。人間は相対的な程度問題の差別に敏感で、それが本質的なものをみる目を損なつている。弱い人を見ては自分が強者であるように錯覚する。自分が本質的には弱いもの、はかないもの、無力なもの、命さえも与えられたものであり、望まぬにかかわらずどんなにがんばってみてもそれが奪われ、自分が無に帰する、ということを忘れて暮らしている。科学としての医学も、絶対的なものではなく、自ら限界があるものである。

トゥルニエは言う。「科学は近代人に物事の機構（メカニズム）だけを示してその内的意味を示さず近代人の世界を盲目で容赦のない自動的な力で満たしている」と。又科学的世界觀に立てば、そこには「出来事の盲目的連鎖があるだけで何事も意味をもたない」と。科学は結局のところ、その現象が—病気が、どのようにして起こり、そのような経過をたどり、どのような薬が有効であるか、などを説明はするが、なぜその人が、その病気になつたの

か、根本的な原因を説明できない。どんなに説得力のある説明も、そういう点では現象の記述にすぎないと言えるだろう。科学者の好む原因とか法則というもつともらしい言葉も、その意味ではきわめて表層にとどまっているにすぎず、その表層を越えた、いわば第一原因の「ときもの」に對しては、全くお手上げなのである。その意味では科学者の唱える因果律も「盲目的な因果律」である。又、科学はどうであるかは説明するが、どうすべきかということは問題にしない。そこには、良心とか、個人の意志とか、どう生きるか、などという問題は全く入ってこない。

重い病気にかかった時自殺する——これは倫理問題である——のか、それともその病気と最後まで戦い抜くのか、とう時、科学は何も答えてくれないのである。しかし宗教や信仰の力などというものも多くの現代人には信じられないことであろう。そのことを宮沢賢治は「宗教は疲れて科学によつて置換され、しかも科学は冷く暗い」（「農民芸術概論」綱要）と言つた。科学という言葉を、科学としての医学という言葉に置きかえるとよくわかる。賢治がここで言つている科学という言葉は具体的には医学だと解釈した時、よく理解できる。医学は確かに病気の原因やその経過について説明してくれる。時には死期まで教えてくれる。だがこれはある意味ではひどいことである。病者は助かるだろうという期待を最後まで持ち続けていたい。ところが医学はその期待がかなわぬことを知らせてくるのである。これは有難いことであろうか。医学的にみて助からぬと考えられる病人を前に医師は何といふのであらう。医学は死の前に全く非力である。医学からすれば死は必然の科学的な因果関係以外の何ものでもない。死を前に苦しみ、悲しむ、病者の孤独など医学は問題にしないのである。いや、死の問題だけでない。重病に陥った時に多くの人が苦しみと共に発する「なぜ自分がこのような病気になったのか」という重い問い合わせに対する科学的説明は、あまりに単純であり、幼稚、非力である。病者は実存の闇から問い合わせを発しているのであって、科学的に問うてはいないのである。病者の発する苦悶——なぜ、こんな病気に自分がかかったのか、こんな病気になつて自分の

人生はどうなるのか、妻や子はどうなるのかなどといった重い問いの前で医学は沈黙するしかない。せいぜい「しかたがない、あきらめて下さい」としか言えない。虫歯を治療し風邪を治してくれる有難い医学もこのようない病者にとつてまさしく「冷たく暗い」と評されてもやむをえまい。医学のもつ「冷たさ」は病者の抱くそれぞれ特有の個別的な苦しみを全く問題にせず、その病気をもつた人すべての必然として、一症例として、しかも逃れられない因果関係をもつて説明することもある。又医学のもつ「暗さ」は病苦の中につけて希望を与えない点にある。人間は希望的存在である。キルケゴールも言うように死に至る病いとは絶望のことである。人は絶望ゆえに自殺さえする。二十才以降の自殺をみると男女とも病苦を動機とする者が一番多く、五十才以降では過半数を占めている。病気の痛み、苦しみもさることながら、助からないという絶望感がそこにはあろう。病苦を動機として自殺した人のほとんどが病院にかかつたであろうし、中には病院で自殺した人もある。医学の与える希望は、その病気が治る、という希望であるが、同時に、皮肉なことにその病気は治らないということをも告げるのが医学である。告げられた者がどう生きるかは医学の関知しないことである。医学は、重い病苦にあえぐ人にとって、一面からみるなら、「冷たく暗い」と言わざるをえないだろう。

賢治が科学か宗教か、いずれによつて生くべきかを問われたなら、自分は宗教を選ぶと書いたのは、宗教的人生観、世界観がすべての生き物を幸福たらしめんとする「宇宙意志」の存在を信ずるからであった。科学の目標は真理の追求である。科学は人間の幸福に役立ちもするが、不幸をもたらした。原子爆弾や化学兵器の深刻な被害を知れば、科学の発達に誰しも悲観的にならざるをえないだろう。 Chernobyl の原発事故、湾岸戦争の半永久的な被害、環境に及ぼす影響などは科学のもたらしたものである。いや科学そのものが悪いのではない、と科学者は言うであろう。その通りである。はつきりしていることは科学は人間の幸福を目的とはしていないということであ

る。科学のめざすところは真理の追求であつて、その真理を人の幸福のためにもそして残念なことには人の不幸のためにも使えるのである。事実として、人間はこれ迄そうしてきたし、今もそうしているのである。

科学が人間の幸福、不幸を直接の目的としないのに対して、宗教は人間の幸福そのものを直接に目標としている。病気や死は人々を不幸に陥れるものである。だからこれをどう見るかということは、医学のみならず宗教の大好きな課題となるのは当然である。宗教と病気の関係は深い。医学は直接に病気を治すこと目ざすのに対し、宗教は病気や死の「意味」を与えるとも言えよう。「意味」など役に立たない慰めであり、つまらないものだと科学者は言うかもしれない。しかし宗教の与える「意味」づけとは、おそらく単なる精神論ではない。宗教の起源はおそらく病気や死というものを解決したいという人間の切実な願いと深く結びついている。仏教は生老病死という四苦からの解放をめざしている。そしてこの生まれる、老いる、病む、死ぬのいずれも現代の医療と深いかかわりをもつていて。キリスト教でも、イエスは「医者を必要とするのは丈夫な人ではなく病人である」(マタイ九・十二)と言ひ、盲目の人、らい病人、手の萎なえた人、耳の聞こえず、舌の回らない人、汚れた靈にとりつかれた人など「ありとあらゆる病気や悪いをいやされた」(マタイ九・三五)とある。つまり、シャカやキリストのやつたことをやつてているのが医師だとも言えよう。「大医王」とは仏の称号の一つであるし、「いやし」は聖書におけるキーワードであり、イエスは「いやす人」だと言つてよい。これを科学の発達しなかつた古代世界の人間の夢や願望の生み出した「神話」と片づけ、現代医学は宗教を乗り越えた、宗教に代りうるものだと言えるだろうか。

宗教を論ずる場合、自分自身の立場を明らかにしておくことが必要でもあり、誠実なことでもあろう。ここで私は、自分自身の立場、研究の視点について述べておきたい。

私は大学時代十九才の時田辺義山老師に師事した。思想家としては鈴木大拙の著作に強く魅かれ、偶然のことか

ら峩山老師を知り、坐禅を組み公案を念ずるという経験をもつてゐる。仙台の名刹、輪王寺に十ヶ月ほど寄宿し、読経し、参禅をし、大学の四年の時は「洗心寮」という禅を学ぶ大学生の寮に置かせてもらつた。大学四年間のうち三年間は何らかの形で禅仏教とつきあい続けてきた。そうして高校の教員として勤め、福岡高校（二戸市）に勤務している二十七才の時、ベトレヘム会のシュトルム神父を通してカトリックを学ぶようになり、現在に至つてゐる。シュトルム神父は私の生涯最大の師である。私は自分自身の人生の問題、生き方の問題としてカトリックを学び続けているが、病者の文学を考えるようになつてから単に私個人の問題としてではなく、病者の生き方の問題としてカトリシズムや仏教を考えるようになった。そして広く病者にとっての宗教のもつ意味や役割を考えてみることが研究者としての使命でもあると感じてゐる。なぜなら病いや死、生命の意味、この人生の意味と目的といったところについてカトリシズムや仏教は深く鋭い洞察力をもつており、それは医療を考える場合、重要な示唆を与えると思うからである。

パウル＝トゥルニエの「聖書と医学」という本に出会つて、私は深い感銘を覚えた。たとえば次のような一節。

「科学の救世主的使命という考えは、すべてその見かけ上の合理主義にもかかわらず魔術への人間の願望の結果に他ならず、驚嘆すべきものへの人間の飢え、救いを求める人間の渴きの結果であるにすぎない。また科学は医学において人々の心から病気や生命や死の意味についての問い合わせを取り除いてはいない。それどころか、科学的医学は物事についてのこのような見地を断固締め出すことによつて病人たちをなおさら孤独にし彼らを神秘不可思議な事柄の前に無防備のままに放置している」

医学は、病気を科学的な因果関係、目に見える物質の関係において捉える。しかし、病者にとって病気とは単純な科学的因果関係で明らかにしえぬ謎であり、人生の深淵である。それは科学的な意味での「病気」というより様

々な意味を複合的に担つた「病い」というべきかもしない。病者はこの「病い」の深淵におびえ、恐怖し、孤独に喘ぎ、泣いている。医師からみた病気ではなく、病者の内面から「病い」について考えてみる——このような発想のもとに私は「病者の文学」を研究テーマとしている。これ迄病気と宗教とのかかわりについて主として述べきたが、病者の文学を宗教的な立場から裁断しようなどいうのではない。宗教的な観点からのみ病者をみたり、宗教のために材料にするなどということでは全くない。一定のドグマや教理で、価値観で裁断するのはつまらないことである。私は「頭」ではなく「心臓」で——理性とか観念でなく、自分の心で——病者の生について、文学について考えてみたいのである。文学は哲学や宗教のようなドグマや観念をもたない。そこでは常に個別的・具体的な生の悩みが問題である。私達は文学を通して偽りのない人間の心、姿に触れることができる。これが文学の強みである。わけても「病者の文学」には遊びや打算を抜きにした、はじめて切実な生の営みを見るができる。それは今病氣に苦しむ人々にとつて励ましとなるだけでなく健康な人をも力づける。又、人生の意味についての深い内省を促す。

医師は患者の身体を診て、「病氣」を診断し治療する。患者の言葉は身体の病変、異常を知る手掛かりであつて、その時の言葉はサイン (sign) である。これに対して病者の文学における言葉は、言葉自体が重い意味を担うシンボル (symbol) である。文学は広い意味ではシンボルを生み出す仕事であり、そのシンボルの意味を解釈することが研究者の一つの任務である。村上昭夫が「病い」といった時、それは単に結核という病気をさすのではなく、病者の生を通してつかんだ「病い」の複合的なシンボルなのである。

「病んで光よりも早いものを知った

病んで花よりも美しいものを知った

病んで海よりも遠い過去を知った

病んでまたその海よりも遠い未来を知った

病いは金剛石よりも十倍も速い光なのだ

病いは花よりも百倍も華麗な花なのだ

病いは光より千倍も速い光なのだ

病いはおそらく一千億光年以上のひとつ宇宙なのだ」（「動物哀歌」より）

ここで言われている「病い」とは肉体の痛み、苦しみがあり、その病名が名づけられ、治療の対象として考えられている「病気」ではない。「病気」にかかったことによつて生まれる内面的な苦しみ、体験を通して病者自らがつかんだ「病い」の意味づけであり、「病い」の意義である。

トルウニエが病気には「靈的」な「意味と目的」があると言う時、その「診断」はカトリシズムの立場に立脚した「意味と目的」である。ここには、科学とは違つた意味での人間の生や死、病いについての普遍的原理に対する確信がある。日本において仏教が「葬式仏教」と言われるようになれば、儀式宗教に陥つてゐるのは仏教の怠慢であり、日本人の偏向である。仏教はもっと積極的に病いや死ということにかかわつていゝし、そこから逆に生きる、ということに対する深い智恵を与えるはずである。仏教にはそのような力がある。ヨーロッパやアメリカでは宗教が医療の場においても大きな役割を果たしている。日本の宗教は賢治も批判したように、あまりに無氣力であり、又、前時代的な呪術信仰に陥つてゐるのではないか。そして何より憂うべきことは、弱者の悩みを餌食とした抨金宗教がはびこっていることである。

トゥルニエの「聖書と医学」は病気・死を接点とした科学と宗教との真摯な対話であり、宗教的な立場からの科学としての医学批判の書もある。トゥルニエは「靈的」という言葉を使い聖書的な視点から病気の「意味や目的」について考察したが、私は広く病者の「内面の問題」として病気の「意味や目的」を考えてみたい。聖書の教える

病気の「意味や目的」とは別に、病者は誰でも病者なるがゆえに一層切実に己が人生の「意味や目的」について問うてゐるのである。健康である時、私達は家庭を支え、社会的活動をすることによって自分の人生の意義について納得しながら生活している。私達はこの社会にあって多くの「役割」を演じながら生活し、その「役割」は他の誰にも代ることのできない重さをもつてゐる。家庭にあっての父や母という「役割」、会社にあっての社員や課長といふ「役割」という具合に私達は社会的なその「役割」を演ずるのに多忙である。病者とはその「役割」を演ずることのできない、あるいはその「役割」を奪われがちな存在である。病者の生の苦しみはここにある。病者にとって生の意義は必ずしも自明のことではない。こうして病者の文学は奪われようとする生の意義を求める文学としての性格を強くもつことになる。

私が「病者の文学」ということを考え出したのは三十四才の時に村上昭夫の「動物哀歌」を読んだ時に始まる。その時は、この詩集に対する感銘ということであり、それを生むものとして病いや死の意識を発見したということであった。つまり、文学への感銘、文芸作品を研究するために病いを考えることであり、作品研究のための視点を発見したことであつた。現在の私は、文芸研究を志すものとして当然、作品を主体として、その作品を生み出した背景としての病いの問題を追求したいと思っている。しかし、同時に又、病者がどう感じ、どう考え、悩み、どう生きたのか、病気のもつ「意味や目的」に対しどのように回答を与えたのかという面からも考えてゐる。一言で言えば、それは病者の苦悩に寄り添うことである。それは「病者の文学」でなく「文学を生み出した

病者」を考えることである。このような問題意識に立つことによつて、文学や文学者の存在は広い意味での医療学への示唆を与えるものともなる。科学としての医学が病者を対象化して、病気の問題として捉えるのに対しして、病者を悩める人間として共感的な理解のうちに捉えようとするものである。

世に「戦争文学」あり「恋愛文学」がある。しかし「病者の文学」とはまだ市民権を得ていない言葉であり、文学の面からも一定の評価をえているとは言えない。单なる「ヒト」でなく「人間」にとって病気がどのような意味をもつか、ということは科学としての医学の面からの研究課題であると同時に、宗教の問題であり、文学や人生の問題でもある。夏目漱石の修善寺大患（「医事学研究」第五号）、村上昭夫の生涯と詩（「医事学研究」第六号）に統いて今回は正岡子規をとりあげてみたい。

二 正岡子規の生涯

(1) その文学活動と病歴

正岡子規、本名常規は慶應三年（一八六七年）—明治と改元される前年であり、子規の年齢は明治の年号にそのまま重なる一に伊予国（愛媛県松山市）で生まれ明治三十五年（一九〇二年）九月十九日、東京都根岸で亡くなつた文学者である。（九月十九日は子規忌、糸瓜忌、懶祭忌などという形で季語になつてゐる）

文学者としての子規の業績は、俳句の革新運動、続いて短歌の革新運動を展開し伝統的な日本の詩歌に新しい息吹きを送り込んだことにある。子規はそれを理論と実作をもつて示した。即ち、「懶祭書屋俳話」（明治二十五年）「明治二十九年の俳句界」（明治三十年）「俳人蕪村」（同）によつて古典俳句の再評価を行い、又、進むべき俳句の道を明らかにした。続いて「歌よみに与ふる書」（明治三十一年）によつて古今集や紀貫之を否定し、万葉集、源実朝を評価する大胆な歌論を展開し、当時の歌人達に大きな衝撃を与えた。それと同時に生涯二万五千四百四十句の俳句、二千三百四十首余りにのぼるという短歌を残して いる。（「子規百首百句」今西幹一、室岡和子著）近代俳句、現代俳句の動脈とも言うべき俳誌「ほとゝきす」は、子規を師として故郷松山に柳原極堂が創刊したものと、虚子が東京に移して、全国最大の俳誌に育てあげたものである。「ほとゝきす」とは子規がつけた名前で、「子規」を訓で読んだものである。同誌は虚子からその子、年尾、孫の稻畠汀子へと受け継がれて今日に至つてゐる。又子規のもとに集まつた根岸短歌会の人々を中心として「馬酔木」^{あしひ}が創刊され、それが「アララギ」へと発展していく。現在、俳人と歌人は多くの場合、互いにかかわりのない別世界に生きて いるが子規は俳人であると同時に、歌人でもあり、しかも近代俳句、近代短歌の「創業者」、その「原点」とも言える存在であつた。

のみならず散文の領域においても子規の提唱した写生文（子規はその研究会「山会」と名づけた）は、夏目漱石の「我輩は猫である」や長塚節の「土」、伊藤左千夫の「野菊の墓」のような作品にも深い影響を与えていた。（「我輩は猫である」は明治三十八年、三十九年、「野菊の墓」は同三十九年、いずれも「ほとゝきす」に発表されたものである）高浜虚子の小説も小説とは言いながら物語性も思想性も弱く、まさに写生文の典型とも思われる。近年子規の隨筆のもつ魅力が大岡信や栗津則雄らによつて評価されている。海外における日本文学研究の第一人者ドナルドキーンは、「子規の作品の中で最も面白いものはその隨筆です」と言い、中でも「仰臥漫録」を稀有な生の記録として高く評価している。

文芸の創作といえば作品を通しての影響関係だけで考えられことが多い。しかし、子規の場合、その人格的影響力というものを考えないわけにはいかない。同郷の後輩でもあつた高浜虚子、河東碧梧桐らの俳人だけではない。伊藤左千夫や長塚節、香取秀真ほさま、岡麓ふもと、佐藤紅緑こうろくといった歌人や作家達はみな子規庵を訪れ、直接その生き方に触れ、その人格に感銘を受けている。子規は、その文学においてのみならず、実人生においても強い感化力をもつ存在であった。

それでは、その子規の人生はどのようなものであったか。端的にいって、これこそ病苦にさいなまれた「不幸」、短命の「みじめな」生涯であった。もし子規が文学と無縁であつたなら、そう形容されても仕方のない病者であつた。ところが子規には文学があつた。文学は子規の希望であり、生きがいであり、その人格・生き方とも一つとなつて多くの文学者を魅きつけたのである。端的に言つて、病いが子規文学を形成し、子規の人格を形成する上で大きな役割を果たしているのである。病いと文学が独自の結びつきをみせているところに、子規の生涯の、その文學の個性がある。

医学的に言えば、子規の病気は肺結核と骨結核——いわゆる脊椎カリエスである。その生活と病歴、そして文学活動を中心とした年譜を作つてみると次のようになる。

年齢	生 活・病 歴 を 中 心 と し て	文 学 活 動 を 中 心 と し て
十五才 (明治十五年)	政治に関心をもち演説に熱中、東京への遊学を希望	文集「自笑文草」をまとめる。
十六才	五月松山中学を退学し六月叔父加藤拓川のはからいで上京、陸羯南を訪ねる。十月共立学校に入学。	
十七才	旧藩主久松の育英事業常磐会給費生となる。夏、進文学舎で坪内逍遙に英語を習う。 九月東京大学予備門に合格入学。	二月隨筆「筆まかせ」を書き始める（一十五才ごろまで続く）
十八才	哲学への関心をつのらせる。学年試験に落第。	俳句を作り始める。
十九才	ベースボールに熱中。	一月大学予備門の友人たちと「七変人評論」を作る。
二十才	四月神田の下宿より第一高等中学校寄宿舎に移る。	
二十一才	八月一日頃、鎌倉、江ノ島へ小旅行。途中初めて喀血。 第一高等中学校予科を卒業。本科に進学。常磐会寄宿舎に入る。	夏「七草集」を執筆。 スペンサーの哲学に影響をうける。
二十二才	一月夏目漱石との交遊始まる。 五月九日夜、喀血。時鳥の句を作り子規と号する。	九月「子規子」執筆。
二十三才	七月第一高等中学校本科卒業。 九月文科大学哲学科に入学する。	帰省中、漱石と文章論を往復。 二月友人と雑誌「つづれの錦」を作る。

	二十四才	二月文科大学哲学科から国文学科に転科する。 学年試験を放棄し木曽旅行を経て帰省。
二十五才	七月	七月学年試験に落第退学を決意。 二月鵜南の紹介で下谷区上根岸八十八に移る。 十月鵜南に相談の上退学。 十一月母と妹を迎えて同居。 十二月一日日本新聞社に出社。
二十六才	二月	十四日血痰があり、鵜南の紹介で医師宮本伸が来診 (以後、宮本は子規の主治医となる)。 七月十九日、芭蕉の奥の細道の跡を訪ねて東北旅行(群馬・福島・宮城・山形・秋田・岩手を経て八月二十日帰京)。秋佐藤紅緑を知る。
二十七才	二月	上根岸八十二番地(鵜南の東隣)に転居、終生の住居となる。
二十八才	三月	三月日清戦争に従軍記者として行くため広島に赴き、一時墓参りに帰郷、四月広島を出港、大連湾に入り柳樹屯、金州、旅順を訪ねる。又森鷗外と会い、毎日のよう訪問する。
	五月	十七日帰路、船中で咯血、重態となる。上陸後神戸病院に入院(五月二十三日～七月二十三日)、七月須磨保養院に移り(七月二十三日～八月二十日)次第に回復。八月末松山に帰り夏目漱石の下宿に仮偶、以後五十一日間漱石と同居、句会を行う。
	「雲百句」「船百句」を作り。	「日本」に異国の戦後を句や詩文にまとめて発表。
	「散策集」(松山での吟行をまとめたもの)を作る。	二月下旬「月の都」を持ち幸田露伴の批評を求める。 「日本」に木曽旅行の紀行・漢詩を発表、「瀬祭書屋俳話」を連載(六月二十六日～十月二十日)。(俳句革新に着手)

虚子との文通始まる。

紀行「かくれみの」(房総の旅)「かけはしの紀」(木曽旅行)を書く。小説「月の都」を執筆。

二月下旬「月の都」を持ち幸田露伴の批評を求める。

「日本」に木曽旅行の紀行・漢詩を発表、「瀬祭書屋俳話」を連載(六月二十六日～十月二十日)。(俳句革新に着手)

二十九才	二月 左腰が腫れて痛み、以後臥病の状態となる。 三月 カリエスと診断される。	十月下旬、広島、須磨、大阪を経て奈良に遊び帰京。 十二月九日虚子と道灌山に行き自己の文業の継承を依頼するが断られる。	十一月二十二日「日本」に「俳諧大要」を連載（十一月三十一日まで二十七日間）。
三十才	一月 松山で「ほとゝきす」が柳原極堂によって創刊される。 三月二十七日佐藤三吉博士により腰部の手術。 四月下旬 再手術。 五月病状悪化、虚脱状態に陥る。 九月臀部に二ヶ所の穴があき膿が出始める。	一月一日「日本」に「明治二十九年の俳諧」を連載開始（三月二十一日まで二十四回）。（後「明治二十九年の俳句界」と改題） 四月十三日「日本」に「俳人蕪村」の連載開始（十二月二十九日まで十九回）。 四月小説「花枕」を新小説に発表、島崎藤村がこれを機に子規を訪ねる。脚韻に注目し逆引辞典「韻さぐり」の編集をし、新体詩に押韻の技法を試みる。 十二月第一回の蕪村忌を子規庵で開催する。	十一月三日子規庵で句会。鷗外、漱石共に参加。 四月二十日「日本」に隨筆「松灌玉液」を連載開始（十一月三十日まで三十二回）。 一題十句（同一の季題で十句作るもの）を試みる。 十句集（女とか飯とか季題によらないで題材によって十句作るもの）を始める。この年俳句会多く、一年に三千三十八句作る。
三十一才	三月十三日河東可全（碧梧桐の兄）への手紙に自らの墓碑銘を同封する。 人力車で数回外出を試みる。 松山の「ほとゝきす」が虚子の手によって東京に移される。九月より虚子が編集、子規は全面的に刊行に尽力し「小園の記」などを掲載する。	一月十五日蕪村句集第一回輪講会。 二月十二日「日本」に「歌よみに与ふる書」を発表（三月四日まで十回）短歌革新に着手する。 三月二十五日子規庵で初めての歌会。 短歌「百中十首」を掲載、多くの短歌を作る。 十一月二十四日第二回蕪村忌。	十一月二十二日「日本」に「俳諧大要」を連載（十一月三十一日まで二十七日間）。

三十二才

五月病状悪化。

秋、中村不折からもらった絵具で初めて水彩画を描く。

虚子のはからいで病室の障子をガラス張りにする。

岡麓宅、虚子宅、不折宅、道灌山などへ時折、人力車で外出する。

三十三才

八月大量の喀血があり衰弱甚だしい。

八月漱石が英國留学のため、寺田寅彦と訪問する。

十一月末子規庵の俳句・短歌の会などを中止して（蕪村句集輪講会、「山会」は継続）養生に専念する。

三十四才

五月病状悪化。

十月のぼせがひどく、時に絶叫号泣する。

十一月六日、漱石に「僕ハモーダメニナツテシマツタ」と手紙を書く。麻痺剤を飲み痛みの柔いだ後を楽しみとする。

三十五才

一月病状悪化、麻痺剤を用い「碧巖録」などを読み、痛みをまぎらわす。

三月十日腹部の穴を初めて見て驚き泣く。

三月末左千夫、虚子らが看護当番を決める。

六月「果物帖」を描く。以後「花帖」「玩具帳」と写生を続ける。

九月十八日麻痺剤を打つ。昏睡。

九月十九日午前一時頃永眠。（翌月十月十四日に満三十五才の誕生日を迎えるはずだった）

九月二十一日葬儀、田端大龍寺に埋葬。会葬者百五十余名。

一月香取秀真、岡麓の訪問を機に短歌会を定期的に開くようになる。

「はがきの歌」を歌人仲間によく出す。

「飯待つ時間」などの写生文佳境に入る。

十一月文章会を開き、その指導にあたる。

一月「日本」に「叙事文」を連載、写生文を提唱する。

一月伊藤左千夫、三月長塚節が訪問、歌会に参加するようになる。

四月万葉集輪講会を始めること。

九月文章を持ち寄り「山会」を開催する。

一月十五日「日本」に「墨汁一滴」の連載開始（七月二日まで百六十四回）。

九月二日「仰臥漫録」を書き始める（断続的に死の半月前まで続く）。

三月十日「仰臥漫録」を改めて記す（「日記ノ無キ日ハ病勢ノツノリシ時也」）。

五月五日「日本」に「病床六尺」の連載開始（死の二日前の九月十七日まで百二十七回続く）。

九月十日枕もとで蕪村句集輪講会を開く。

九月十四日隨筆「九月十四日の朝」を口述筆記。

九月十八日午前十一時頃、絶筆糸瓜三句を記す。

子規の生涯と文学活動は病氣を視点として三期に分けて考えるのが合理的である。

第一期（十五才から二十一才まで習作期と言える）

比較的健康であり、自由民権運動の影響を受けて演説に熱中し、松山中学校を中退し憧れの東京で「書生」としての生活が始まる。このころの東京は人力車夫と書生の町と言われていた。「書生」とは明治・大正期の大学生を呼ぶ言い方である。明治十五年の例で言うなら大学は日本にはただ一つ「東京大学」（帝国大学と改称されるのは明治十九年）があつただけで、「書生」の数も三千人、まさにエリート中のエリートであった。「書生」は近代化のシンボル、新東京のシンボルとも言える存在で、そのねらいは官途について「立身出世」することであり、「食客」（他人の家に寄食し、手伝いなどしながら大学に行かせてもらうことが多かった）として貧しく暮らしているように見えてその誇りは高かつた。「書生書生と軽蔑するな 明日は太政官のお役人 書生書生と軽蔑するな 大臣参議はみな書生 酔うて枕す美人の膝に 醒めてにぎるぞ天下の権を」などという当時のやり歌にそれが端的に示されている。子規の文学活動には明治の文明開花期における「書生」の意識が反映している。その文学的交友関係も「書生」の交りを母胎とするものであり、俳句・短歌の革新運動も、文学における近代化の一例とみられる。

政治家から哲学者へと子規の志望は変わっていくが、幼少年期に漢文によって鍛えられた（母方の父、大原觀山は松山藩の儒学者で、子規は六才にしてその私塾に通い素読を習っている）その文才はきわめて早熟であり十五才すでに「自笑文草」をまとめ、十七才で隨筆「筆まかせ」を書き始める。後者は晩年の名隨筆を生み出す土台となつたものであり、二十五才ころまで書きつがれていく。一方、韻文みると十八才で俳句を作り始め、二十一才で和歌・漢文・漢詩・俳句など様々なジャングルを含んだ「七草集」をまとめ同級生に回覧している。学校での勉強は熱心でなかつたが雑多な本をよく読み、寄席に行き、ベースボール（野球は明治六年アメリカ人、ウィルソン

が開成学校で教えたのが始まりと言われているが、大学予備門で大いに流行し、明治二十年ころ、子規は第一高等中学の名キャラッチャーであったという）を楽しみ、多くの友人達と交際を深めていく。もともと書くことが好きでたまらなかつたとは言え、この時期の子規には文学者たらんとする自覚もなく江戸の文人達を模倣した素人の遊びと言つてもよい趣味的なものであつて、習作期と言つてよい。二十一才の時書かれた「七草集」によれば「吾生まれつき弱く殊に去年の春いたく病み煩ひしよりいつ癒ゆべうもおもほえず人生五十といふそれさえ覚束なければけふも無事に過ぎたりとて日毎に喜びなる身こそかなしけれ」と病弱の身を嘆いているところからみて、生来肉体的には虚弱な体质であつたと考えられる。

第二期（二十二才から二十八才までの自己確立期。結核に冒されるが、学生として、又、中退後は日本新聞社員として自由に活動できた時期）

漱石との交遊が始まつてまもないころ、再度の喀血（最初の喀血はその前年であったが、この時は何ら問題としなかつた）があり、病者としての人生の自覚をあらたにするところから文学者「子規」が誕生する。子規とは結核の隠語であり、病いを生きる文学者「子規」の誕生であり、これを作品化したのが「子規子」である。幸田露伴の「風流仏」を読んで感激し、自らも小説家たらんとし二十五才の時、小説「月の都」を書く。そして露伴の批評を求めるがその認めるところとならず、虚子あて書簡の中で「僕は小説家となるを欲せず詩人とならんことを欲す」（明治二十五年五月四日）とか「人間よりは花鳥風月が好きなり」（同五月二十六日）と書くように、小説をあきらめ、詩人＝俳人としての自覚を深めていく。

「俳句分類」（古典俳句を季題別に分類、整理していく地味な作業で、子規はこの作業を通して俳句の素養を身につけていく）には二十四才の冬から着手しているが俳句に熱を入れるのはこれ以後である。文科大学の哲学科か

ら国文科に転じたのもこの年であり哲学者から小説家志望として詩人と、己れの道を定めていく。しかし、それは学校で先生から学ぶということではなかつた。学生としての子規は怠惰で試験勉強などろくにせず大いに気を吐いていた。優秀なものは飛び級もあつた代り、落第もどんどんさせたのが当時の大学である。子規は二十五才の時は学年試験に落第、陸羯南と相談の上退学することとなる。そして陸羯南主催の日本新聞社に入社して経済的自立の基盤を固めた。さらに羯南の勧めで二十五才の年には故郷松山から母と妹を招き共に暮らすようになる。こうして結核の発病をみたとは言え、病床に臥することもなく「新聞」という自らの文章を公にする職を得て、活発な活動を開拓し始めた。

しかし二十八の時、一切の反対を押し切つて日清戦争の従軍記者として中国に赴いたことは子規の健康にとって痛恨の極み、決定的な打撃となる。明治二十八年二月二十六日五百木瓢亭（良三）にあてた書簡に次のように言う。

「皆に止められ候へども雄飛の心抑えがたく終に出発と定まり候。生来希有の快事に御坐候。小生今迄にて最も嬉しきもの 初めて東京へ出発と定まりし時、初めて従軍と定まりし時、の二度に候。この上になお望むべき二事あり候。洋行と定まりし時 意中の人を得し時の喜びいかなむ、前者或いは望むべし 後者は全く望みなし。」

子規にとって従軍記者として中国に渡ることは、東京遊學が決定したのと並ぶ大きな喜びだったのである。それはなぜだろうか—瓢亭が犬骨坊の名で寄せた従軍記「従國日記」が新聞「日本」の名物となっていたこと、家庭向きの新聞として子規が編集長となつて創刊した「小日本」が数カ月で廃刊になるという挫折感もその背景にはあつたろう。だが、従軍に対する抱負を子規は次のように書いている。

「征清の軍起こりて天下震駭し旅順威海衛の戦捷（＝戦勝）は神州（＝日本）をして世界最強国たらしめたり。

兵士克く勇に、民庶（＝人々）克く順に、以てここに国光を發揚す。而して戦捷の及ぶ所、徒に兵勢ますます振ひ爱国心いよいよ固きのみならず、殖産富み工業起り学問進み美術新ならんとす。吾人文学に志す者亦之に適応し之を発達するの準備なかるべけんや。僕、たまたま觚を新聞に操る（＝「觚」は、昔文字を記した方形の木の札。新聞に文章を書いている）、或は以て新聞記者として軍に従ふを得べし、而して若しこの機を徒過（＝いたずらに見過ごす）するあらんか、懶（＝なまける）に非ざれば即ち愚のみ、傲（＝おごり高ぶる）に非ざれば即ち怯（＝いくじがない）のみ。是に於て意を決し軍に従ふ」（明治二十八年二月二十五日 河東秉五郎・高浜清宛）

日清戦争の勝利による国威の高揚、経済や産業の発達、学問・芸術のめざましい動きに感應する若々しい心からくる使命感をここに伺うことができる。子規は二人の後輩に手渡ししたこの書簡の中で、自分の志望は文学にあることを述べ、その文学を新時代にふさわしく発達させるのが自分の任務でありそれゆえの従軍であるということを語っている。この書簡の中で子規は、文学には詩文や小説を創作する「雅事」と文学書を編集したり、文学者を教育する「俗事」の二分野があるという。「雅事」に従うには「景勝地」を訪れ、又、人間を究めることが必要である。そのためには「世務」つまり「仕事」や「煩累」（煩わしい妻子係累）があつては難しい。一方「俗事」に従うには材料を集め、英才を集めるために「巨万の金」を必要とする。自分は文学を志望するとは言え「雅事」「俗事」いずれの条件も満たしておらず、どの方面に進んだらよいか迷っている。しかし、従軍は得がたい好機であり、これがいづれにつながるかわからないにせよ、この従軍体験を文学のために役立てたい。自分は才能も学問も財産も地位もない。ただ「志を立つこと遠大」であり、文学者としての大きいなる野心をもつてているのだ、と書いている。こうしてみると従軍は文学者たらんとする「志」——大いなる野心に動かされてのことだったことがわかる。文学者として隆盛する国家の氣運と共に生きたい、野心実現の一つの契機としたいというのが子規の従軍の動機で

あつた。自分の病状をかえりみないこのようないい健康な意欲、明治の青年らしい野心こそ子規を従軍にかり立てたものであつた。かくして四月十日宇品を出発するものの戦局はすでに休戦協定が成立（明治二十八年四月十七日日清講和条約調印）していた。そのために戦地の実況を確かめようとする子規の念願は果たせなかつた。しかし、戦争の惨禍は句や詩文によつて日本新聞に発表される。「わがすめらぎの春四月　金州城に来てみれば、いくさのあとの家荒れて　杏の花ぞさかりなる」（「金州城」）にはじまる一連の新体詩もその一つでこれは子規の言葉を借りればその従軍体験を「雅事」として生かしたということにならう。又、金州で、陸軍軍医（第二軍兵站軍医部長）として勤めていた森鷗外を連日のように訪れ、連句を作つたりしたのは、「俗事」につながるものであつたろう。従軍は文学者たるんとする子規に有益であつたには違ひない。しかし、子規が文学者として大成するにあたつての決定的な出来事は、この従軍の結果病状を決定的に悪化させたことであつた。即ち十七日の船中での喀血、二十三日神戸につくやそのまま神戸病院に入院、やがて須磨保養院へと移り、重態・瀕死の状態からやがて小康を得るも翌年、脊椎カリエスによる臥褥生活を余儀なくされる。その決定的な原因がこの無謀な従軍にあつたのである。それは子規の周辺の人々が皆不安に思つていたことが現実になつたということである。子規の従軍に賛成した人は一人もなかつた。しかし、皮肉なことに、子規はこの従軍を契機とする病氣の悪化によつて、ますます文学に燃え、その野心通りの「大文学者」へと成熟していくのである。

第三期（二十九才からその死までの約七年間で子規文学の成熟期・完成期である。脊椎カリエスによる臥床生活を強いられる中で多彩な文学活動を展開した時期）

二十九才の二月以降、子規は脊椎カリエスのため臥褥生活を強いられ、時たま人力車に乗せられて外出する他は「病床六尺」の小さな世界を自分の世界として生きるようになる。瓢亭宛書簡の中でそれができたなら、どんなに

うれしいだらうと語つていた「洋行」はおろか、楽しみとしていた旅行も全く出来ず、「意中の人」を得ることなど望むべくもない、痛み、苦しみと戦いながらの生活である。三十才の時には二度にわたる手術を受け（後述するようく膿を排出するだけの手術である）、危篤状態に陥り、三十一才の時には河東銃（可全）にあてた手紙の中に自作の墓碑銘を同封する。

「正岡常規又ノ名ハ処之助又ノ名ハ升又ノ名ハ子規又ノ名ハ瀬祭書屋主人又ノ名ハ竹ノ里人。伊予松山ニ生レ東京根岸ニ住ス父隼大松山藩御馬廻加番タリ。卒ス。母大原氏ニ養ハル。日本新聞社員タリ。明治三十□年□月□日没ス。享年三十□才。月給四十円」

子規自らの手になる一生の要約である。「月給四十円」とは生活を支える具体的・現実的なものを即物的に表現したものでいかにも子規らしい記述である。子規としてはきわめてまじめなつもりであろうが、読む人をして笑わしめるような正直さ率直さがある。「明治三十□年、三十□才」という所に端的に伺われるよう、これは死の近いことを意識した上に立つて書かれている。何も墓碑銘に限つたものでない。この時期の作品のすべてがその活動のすべてが死の近いことを意識したところから生まれたものとも言える。そして、このような死の意識は、あきらめにつながるのでなく、むしろ子規を文学に駆り立てる原動力でもあった。

友人の藤井紫影に「小生はいよいよやけなり、文学と討死の覚悟にござ候」（明治二十八年十一月二十四日書簡）と書いた通り「文學者」たらんとする野心は火のように燃えさかつて、病床に呻吟しつつも活発な活動を展開していくのである。子規の文学の成熟・完成はこの病床生活を通してもたされたものである。この時期の活動は第二期の俳句・俳論を中心とした活動から連載隨筆「松灌玉液」「墨汁一滴」「病床六尺」や歌論「歌よみに与ふる書」、病床の感慨をにじませた数々の短歌、写生文、日記「仰臥漫録」など子規がもともともつていた様々な才能

が開花した。これらの創作は子規の言葉で言えば「雅事」である。

しかし、子規の文学活動は「俗事」において——文学者を集め、教育し、編集などすること——も發揮された。即ち子規庵に集まつた人々を中心として文学的共同体が形成され、その共同作業を通して自分自身の作品がみがかれていくと同時に、その中から多くの優れた文学者が育つていく。具体的に言えば二十九才の時の鷗外や漱石まで参加しての子規庵での句会を始めとして、以後蕪村忌の法要、蕪村句集の輪講会が開かれ三十二才の時には短歌会を定期的に開くようになり「万葉集」の輪講会も始める。これがいわゆる「根岸短歌会」である。更に文章——写生文の研究会（山会）が開かれる。このような研究会は病床に臥す身となつてから開かれるようになつたものであり、病床にある文学の先生「子規先生」を囲むグループがそこに形成される。グループはじめ子規と同郷の青年達や学友であったが、しだいに、その輪は全国に広がっていく。その宣伝力となつたのは子規が「日本」新聞に自分の作品や主張を発表したことだつた。「日本」を読んで子規の存在を知り、その文学・人格を慕い、その病状を気遣う人が全国に広がつていった。その意味では新聞は子規の私信を発する場であり、新聞を通して交流の場が、温かい共同体が形成されていったとも言える。「墨汁一滴」や「病床六尺」は新聞というメディアを得てはじめて完成された隨筆である。子規はその墓碑銘として自ら記したごとく終生日本新聞社員でありジャーナリストであった。だが、このジャーナリストは社会を論ずるより文学を、己れを語ったジャーナリストであった。そしてそこには單なるジャーナリストとして消えてしまふことのない強烈な個性があり、人々を魅きつけ、感動せしめる力があつた。どんなすぐれた人物でもそれを伝えるメディアがなければ人に知られずに終わるであろう。その点から考えれば臥病生活を強いられているこの大病人を見捨てることなく最後まで社員として、又隣人として遇した陸羯南の恩恵も大である。「『日本』新聞社員タリ」という墓碑銘の一節は、それに対する感謝と、そこを舞台にして活動した自分

の生涯に対する自負とも読める。当時よりはるかに進んだ現代の社会において、このような病者をクビにしないで在宅勤務のような形で待遇してくれた企業がどれ程あるだろうか。子規が最後の最後まで文学者として活動し、その命を燃焼させることができたのは、その活躍の舞台——「日本」新聞が与えられていたからである。

このようなジャーナリストとしての活動、広い意味での「宗匠」（本来は俳句の師匠を言う）としての活動とは別に、病者子規が、病者としての己れの姿を徹底的に表現したのが「仰臥漫録」である。これは病いの生の、類いまれな記録であつて、文学として考えた場合、子規最高の作品だと私は考えている。のみならず、これは病いの生の、^{たゞ}類いまれな記録であつて、文学として考えた場合、子規最高の作品だと私は考えている。のみならず、これは今なお古典としての生命力をもち生きている私達に語りかける力をもつていて、これは私達に「人生の質」（Quality of life）を問いかける作品であり、「人生の書」である。そして医療を考える場合——病者の生という人間の永遠の課題を追求する時のかけがえのない生きた、生々しい資料として輝き続けると思う。病苦と戦つてこれ程苦しんだ人、しかもそれを最後の最後まで表現し続けた人は稀有だからである。

(2) 子規と結核——書簡にみる病歴

ここで結核及び脊椎カリエスという病気について触れ、更に子規の場合、どのような病状であったのか、又、その生活はどうであつたのかをその書簡及び第三者の証言によつて確認しておきたい。それは文学者子規を苦しめ、育てた病気を知ると同時に戦前迄の日本において死病とされ死因のトップであつた結核という病気について知り、昭和二十四年ごろまでは数多くみられたものの現代ではほとんどみられない脊椎カリエスという過去における病気を知ることである。病気は単に身体の問題でなく、社会の産物でもあり、病苦を生きる、その生き方や生活には病者の個性はもちろんのこと、時代や社会の姿も反映してもいるから、医療史のささやかな資料ともなるう。

結核とは結核症特に肺結核の略である。結核菌の感染によつて起ころる慢性の伝染病で主に患者の咳・痰の飛沫に含まれる結核菌によつて感染する。感染後は肺に病巣を作りさらに他の臓器に結核菌が運ばれて各部の結核症を起こす。結核菌を発見したのはコッホで、一八八二年（明治十五年）のことである。子規が肺結核と診断されたのは明治二十二年のことであるから、西洋医学輸入の早さを感じさせられる。又この明治二十二年という年は、兵庫県須磨浦に結核療養所が設立された年でありこれがわが国における結核対策の始まりとされている。子規は明治二十八年にこの須磨浦保養院に入院している。又、明治四十一年にはコッホ夫妻が来日し北里柴三郎と会っている。北里はコッホのもとで破傷風研究に画期的業績をあげ、明治二十五年伝染病研究所を創立していたのである。診断はついても当時その効果的治療法があつたわけではない。結核による死亡率は昭和十年から二十五年まで第一位である（「国民衛生の動向」）から、明治時代もおそらく同様でまさに「国民病」と言えるものであった。明治時代の平均寿命は三二・三才であつたと言われるが、それは乳幼児の死亡率が高かつたことと、コレラやペストのような急性伝染病によつて一度に数万にも上る人々が死んだこと、結核のような慢性伝染病が若年層をむしばんだためである。これらの病気が近代化の一侧面であつたことについては、後述するとして、戦後急性伝染病は流行をみることもほとんどなくなり、結核もスプレットマイシン、トビラジド、リファンピシン等の抗結核薬の開発によつてその死亡率ははるかに下がり平成二年の調査では第十七位となつてゐる。特に若年者ではその低下の程度が著しく、現在結核が問題になるのは多くの場合老人性結核である。結核はかつて学校や職場などで集団的に感染することが多く、結核菌に対してもつたない（ツベルクリン反応で陽性）田舎から都會に出た人に多くみられた。又家族感染も多かつた。多くの病気が貧困や過労、無知を背景としてもつてゐるが、結核もその点変わりない。しかし、結核は知識青年をむしばみ、それが文学作品となつていることもあつて文学者の病い、という側面をもつてゐる。

特に子規の場合、その長い鬪病生活からみて、又その文学の性格からみて、結核という病気が文学者子規を育てる重要な契機となつたと言える。その書簡がこれを証明している。従つて子規の文学—その病いと戦つてあれ程多彩な文学活動を展開した秘密を探ろうとするものは、子規の書簡をひもとかねばならない。

子規は膨大な分量の書簡を書いた人である。その友人であつた漱石も多くのすぐれた書簡を書いた人として知られているが、子規の書簡はそれを質、量共ともにしのぐものだと私は思う。子規の書簡には温かい人情があり、ユーモアがあり、人間感情の率直な表現がある。そのあるものは文学であり、書簡文学として第三者が読んでも深い感銘を覚える。のみならず、その隨筆や評論も書簡としての性格をもつていて注目されてよい。「歌よみに与ふる書」は文字通り書簡のスタイルで書かれている（「書」は「書簡」という意味である）し、晩年の隨筆も読者に対する私信としての性格をもち、読者からの便りに応えるという形で書かれている部分もある。子規は書簡を書くのが好きであり、それによる交際を求め続けた人である。簡単に会うことのできる人、ふだん会っている人も書簡を出していることもある。書簡は単なる交際ではなく、文学的的交流の証であり、それ自体「文学」だったからである。講談社版の子視全集全二十二巻のうち二巻が書簡である。ちなみにその全体を紹介しておくと俳句が三巻、俳論、俳話が二巻、短歌、歌会稿一巻、歌論、選歌一巻、漢詩・新体詩一巻、初期文集一巻、隨筆三巻、小説・紀行一巻、評論・日記一巻、俳句会稿一巻、俳句選集一巻、俳諧研究一巻、研究・編者一巻、草稿ノート一巻年譜・資料一巻である。これみると三十五才に満たない短い人生の中での、実に多彩な活動ぶりがしのばれるのだが、書簡の多さも目につくところである。それは子規の社交的な文人意識の反映であるが、同時に子規が病弱であつたことも背景にある。健康で多忙な人、実際的な活動に忙しい人は一般にあまり手紙を書かない、書くだけの時間的余裕もないであろう。それに対し病者は外に出て活動できないし容易に人に会うこともできない。病気のた

めに様々な不安、苦しみを味わねばならない。病氣のために無為なつれづれの時間を強いられる…。これら病氣のマイナスの諸条件が子規をしてあれ程の書簡を書かせたとも言える。書簡を書くことは病者子視のあみ出した生の一工夫であり、書いているうちに、その苦しみもいつのまにか喜びや笑い、「文学的な」悲しみ—表現という創造活動に転じていくこともあった。そこでは、肉体の苦しみは動物的な叫び、呻きではなく、美の表現に転じ、人々の心を打つのである。これは書簡以外の子規の文学活動一般についても言えることであるが、書簡は直接的な相手があるだけにナマな形でそれが表現されている。子規の書簡は、私信でありながら、文学そのものと言つて過言でない。

書簡は相手の安否を氣づかい、自らの健康状態を述べるのが一般的な形式である。二十三才の結核発病から、その死に至るまで病苦に悩まされることの多かった子規の生涯は自ずと一種の「病歴報告書」の観を呈している。以下第Ⅱ期の結核発病から脊椎カリエスに至るまでの病歴を書簡を摘記し解説を加えながら辿つてみたい。（表記は読みやすくするため一部改めた。カウコ内の〔〕以下の説明は筆者の注である）

①我が師とも頼みぬる服部うし（〔師匠、学者の尊称。大人〕）の都を去りて遠き故郷へ帰らるゝと聞きて、いとゞ別れのつらき折から如何にしけん、昨夜より血を喀くことおびただしければ、ひとしほ頼み少なき心地して ほととぎすともに聞かんと契りけり血に啼く別れんと知らねば（明治二十二年五月十日 服部嘉陳宛）

〔常磐会寄宿舎にいた子規が、その初代の監督であった服部嘉陳に宛てた書簡。嘉陳は同年病を得て監督を内藤鳴雪に引きついで松山に帰省し、二年後に没した。子規がこの寄宿舎に入ったのは明治二十一年九月から二十四年十二月までで、ここで子規は内藤鳴雪・竹村鍛の三人で「言志会」（明治二十二年）を結成、翌年には舍生の五百木瓢亭、河東銓、新海非風などと「紅葉会」を起こし、回覧誌「つゝれの錦」を発行した。子規の、文学を一種のグル

ープ活動として展開していこうとする姿勢はこの寮生活においてすでにみられるところであり、常磐会宿舎の文学的交流・趣味的な活動は、子規の文学活動の原型だった。この書簡は咯血直後の気持ちを述べたもので師と頼む人を失った上に自分も病氣にかかった、（同じ寮での生活であり病氣も同じ結核であった可能性が高い）その不安は大きかったであろう。「ほととぎす：契りけり」というのは嘉陳と子規の間に一種の文学的な交流があつたことを示していよう。「血に啼く別れ」とは結核（ほととぎす病と呼ばれた）による永遠の別れ（死別）を言う。」

②私一夜以来吐血致し候ところ、右は全く肺衝（＝肺炎）の由。しかし数日にして全癒するとの診断ゆえ御心配下されまじく候。今にして早く防がずんば不都合の由に御坐候。別に苦痛もなく格別の事は之なく候へども、もし他方よりこの事御伝聞に相なり候はば御気遣いも、之あらんと思ひ、一寸、申し上げ置き候。くれぐれも御心配下されまじく候。右の肺が悪きゆえ何をするも左手を使ふは真の杞憂（＝無用の心配）にして苦痛のわけには之なく候。（中略）病氣の事、母上はじめ他の方々へはなるべく御話、之なきよう祈り奉り候。都合つき候はば金少々御送り下され願い奉り候。私卯歳なれば卯の花にも縁あり。従つて啼血するといふ杜宇（ほととぎす）にも廻り親類に相なり候もいとおかし。卯の花をめがけてきたかほととぎす 小家、父上などに肺病の筋、之あり候ふや御報せ願い奉り候。

（明治二十二年五月十一日 大原恒徳宛）

〔大原恒徳は母八重の弟にあたる叔父である。父が死去したのは明治五年。以後母子家庭となつた子規一家は母方の実家である大原家の庇護をうける。東京遊学も恒徳の兄大原恒忠（後、外交官となつた加藤拓川）の援助によるもので、日本新聞の社長陸羯南（実）との縁もこの加藤拓川の紹介によるものである。子規は学生時代のみならず生涯にわたつて叔父、大原恒徳の経済的援助を受けた。病氣療養とか生活費のためである。この書簡は病氣になつたことを告げる最初のものである。病氣になつたことを知らせないように、というのは母や親戚に無用の心配をか

けまいとする心遣いばかりではなく「肺病」が当時一族の業病として恐れられていたことや病気のもたらす差別を恐れる気持ちも底には潜んでいると思われる。又「肺病」は遺伝（血筋）によるものだと考えられていたことも知られる。①の書簡と言い、この②の書簡と言い、発病の報告が短歌や俳句を通して述べられているのは興味深い。このような書簡が後述する「子規子」のような文章を生み出す母胎を用意したのである。」

咳・痰・胸痛・喀血・血痰が肺結核の五大呼吸症状と言われるが、初期のうちは症状も軽く、それと気づかれないことも多いという。子規も二十一才で最初の喀血はあつたものの、全く無頓着であった。しかし二十二才で再度の喀血を見（痰に血痕が交じる）それが一ヶ月余りも続き発熱、食欲もなくなり、この時初めて医師の診断を求める。この最初の発病の時、子規のために奔走したのは、友人の夏目漱石（金之助）である。明治二十二年五月十三日付の子規宛てた漱石の手紙がある。それを紹介する。

③今日は大勢まかり出で失礼仕り候。しからばそのみぎり帰途山崎元修（＝当時、本郷区真砂町に開業していた医師で、医学校（帝国大学医科大学の前身）の第一回卒業生）方へ立寄り大兄御病症並びに療養方等、委曲質問仕り候ところ、同氏は在宅ながら取込み之ある由にて面会するを得ず、不本意ながら取次を以て相尋ね申し候ところ、存外の軽症にて別段入院等にも及ぶまじき由に御座候へども、風邪の為めに百病を引き起すと一般にて、喀血より肺労又は結核の如き劇症に変ぜずとも申し難く、只今は極めて大事の場合ゆえ出来るだけの御養生は専一と存じ奉り候。小生の考へにては山崎の如き不注意、不親切なる医師は断然廃し、幸ひ第一医院（＝帝国大学構内にあった医科大学付属病院。第二病院は速成医養成のための臨床講義を目的として神田和泉町に設置されていた）も近傍に之有り候へば一応同院に申込み医師の診断を受け入院の御用意、之有りたく、さすれば看護療養万事行き届き、十日にて全快する処は五日にて本復致す道理かと存じ候。かつ、少しにも肺患に罹るプロバビリチー（＝可能性）あ

る以上は二豎の膏肓に入らざる前に（＝治療の施しようがないほど病気が重くなる前に）英断決行、之有りたく、生あれば死あるは古来の定則に候へども、喜生悲死もまた自然の情に御座候。春夏四時（＝春夏秋冬、季節）の循環は誰も知る事ながら、夏は熱を感じ冬は寒を覚ゆるもまた人間の免かるる能はざるところに御座候へば、小にしては御母堂のため、大にしては国家のため自愛せられん事こそ望ましく存じ候。雨降らざるに戸を縹繆す（＝雨が降つてないのに窓や戸を補修して、雨風を防ぐ用意をする）とは古人の名言に候へば平生の客氣（＝血氣。勇み立つて物事をしようとする意氣）を一掃して御分別、之有りたく、この度願い上げ候。

to live is the sole end of man!（＝生きねえ」といそ人の唯一つの目的）

五月十三日

帰ろふと泣かずに笑へ時鳥

聞かふとて誰も待たぬ時鳥

金之助

正岡大人 梧右（＝机下。手紙の宛名のわきに添えて敬意を表す言葉）

いづれ二三日中に御見舞申し上ぐべく又本日米山、龍口（＝米内保三郎・龍口了子信。共に第一高等中学校の同級生）の両名も山崎方へ同行してくれたり

僕の家兄（＝夏目和三郎直矩）も今日吐血して病床にあり。かく時鳥^{ほととぎす}が多くてはさすが風流の某^{それがし}（＝私、自分）も閉口の外なし。呵々（＝あはは、と大声で笑うこと言うが、手紙の末尾などによくつけた）

「子規と漱石は同年の生まれで明治十七年九月東京大学予備門（明治十九年第一高等中学校と改称）に入学している。しかし子規は明治十八年学年試験に落第、一方漱石も明治十九年腹膜炎にかかり進級試験を受けずに落第、明

治二十一年九月第一高等学校本科で同じクラスになり、翌二十二年一月ごろから、寄席好きという共通の趣味がきっかけとなり、急速に親交を深めるようになる。この書簡は漱石に宛てた計六十一通の書簡のうち最初のものである。漱石の子規あて書簡は明治二十二年八通、二十三年七通、二十四年九通、二十五年五通、二六年二通、二十七年四通（以下略）となつており、この時期の書簡の大半は子規宛て書簡で占められている。

この書簡は喀血した級友の子規を、同級生達と見舞つた後（子規はこの時常磐会に寄宿していた）書かれたものである。家元を離れて暮らす子規の病状を案じ、病院を変えるように助言し、健康に注意するようアドバイスしている。「平生の客氣」というのは、友人子規の無謀な気負いを戒めたものである。「帰らふと泣かずに笑へ時鳥」の句は、子規が病氣のため弱氣になり帰省するかもしれないと言つたのに対して、泣き言を言わずにがんばれと励ましたものである。「時鳥」とは前述したように結核の隠語で、おそらく子規は叔父に宛てた書簡（②）に記した「卯の花をめがけてきたかほととぎす」という自らの句を漱石に紹介したことがあるのであろう。子規の心は「客氣」と「弱氣」の間で揺れていたと思われる。又「聞かふとて誰も待たぬ時鳥」の句は、友人子規の突然の喀血に驚き、心配する気持ちを述べたものである。困った時こそ眞の友と言うが、病氣になつた友人を思う温かい気持ちのあふれている書簡である。漱石の兄夏目和三郎も同じころ喀血したことから「かく時鳥が多くてはさすが風流の某も閉口の外なし」と苦いユーモアをもらしている。結核が身近に見られる大病であつたことをこの書簡は示してもいる。」

④小生、子規病に御縁遠く御座候。もつとも先日学校にて肺量相ばかり候ところたつた二百七〇リットル、實に情けなきことに御座候。前便さし上げ候端書に咄^はき出し云々の文句、之有り候ゆえ、貴公定めて御一驚と存じ候。しかし是は時節がらまだ郭公は鳴かぬ（＝結核ではない）つもりゆえ、御安心下されたく候。実は先日少々少々腹具

合のよろしくなきところへ蕎麦と菓子をつめこみ候ゆえ嘔吐を催したる迄なり。この日は丁度四月一日なりければ西洋にても April foolとか 申して人を欺きてもかまわぬ日と承り候ゆえ、この悪じやれに及び候段、御宥如(= 御許し)願い奉り候。この些少なる病氣ももはや全快致し候。（明治二十三年四月初め 大谷藤治郎宛）

「大谷是空（藤治郎）は大学予備門の学友で明治十八年創作「照魔鏡」で子規の評を受け、子規の「龍門」を批評した文学仲間で子規の影響で俳句を作るようになった人物である。「お百度参り」と題する子規との往復書簡は明治二十三年に書かれたもので七十余回にも及んだ。子規はそれを書き写して「筆まかせ」という隨筆集に収めている。この書簡は前便で咯血したと報じたのはエプリルフールのいたずらだと述べ、病氣も全快したと強がりを言つたものである。」

⑤私も前月末ごろ、脳病（憂うつ病の類）にかかり学科も何も手につかず候ゆえ、十日の闇をぬすんで、房総地方へ行脚と出掛け申し候（明治二十四年四月六日 大原恒徳宛）

「子規は自分の病氣として「子規病」（結核）と「脳病」の二つを意識していた。「脳病」はおそらく青春期特有の憂うつ感を言ったものと思われるが、精神的には健康と評されることの多い子規にあって、この二十代初めの「脳病」についてもう少し吟味が必要だと思われる。この「脳病」のため同年三月二十五日から四月二日にかけて房総半島を行脚したが、それを報ずる書簡である。」

⑥私も先頃、存外丈夫にて人も称し（= 言う、たたえる）自分も相許し候ところ、十日程以前より何となく不穏の兆候を顯し候。病氣は脳と肺と同時に来たりたるものに候へども、どちらももとより病といふべき程には至らず畢竟するに（= 結局）その原因は身体の衰弱にある事なればと思ひ先日より急に養生をはじめ申し候。養生とても牛乳をのみ、鶏卵を食する位にて鰻店、肉店、西洋料理などは先日やつと一度ずつ相のぞき候へども、これらはどうて

い一月一度位の割合にあらざれば行く能はざるは（＝行くことができないのは）当然につきいたしかたもなし。そこで色々と考へみるところ、私の病体を維持せんとするには、つまり家を持ちて養生するにしかずと存じ、ここに再び東京に一家を持つことの念を起し候。この説は昨年も起したことなれども経費の件につきてついに廃案となりしものなるが今日の有様にて考ふるに、とても経費などと論すべき場合にあらず（病気はもとよりさしたことなきも）しかし小家の、ぱつちり然たる（＝少しばかりの）財産をはなちつくしても、なほできぬ仕事ならば、やむをえぬわけゆえ、そのところはいかがのものなるや。なほ、その他の利害につきて御考え合わせも御座候ばばお聞かせ下されたく願い奉り候。右事件はいまだ誰にも話さず、忠叔父様にも二三日中に御相談するつもりに御座候。

病氣と申してさしたる事もなく寝るような事はもとより少しもござなく候へども、脳の悪き時は（脳痛・頭痛にあらず）狂に近きことあり。又衰弱の時は昼夜の別なく、たわひもなく寝ることも御座候。又、子規病に関しては先日、ちょっと痰中に血の一点を見たること之有り候。（ほんの一点也。大きさは。位）その後つづきて出るわけにも之なきゆえ、服薬も致さずただそのつもりで少し用心致しをり候。（明治二十四年四月二十八日 大原恒徳宛）

「この書簡でも病氣は脳と肺（子規病）だということが述べられている。痰中の血の大きさを。印で示すなどいかにも子規らしい即物主義である。結核よりも「脳」の病氣を心配しているが、それは「狂に近い」とさえ言う。相当強いうつ的なメランコリックな情動で、無氣力になつたのであろう。「衰弱」とは身体のそれより、むしろ精神的なものを示すと考えられる。興味深いのはどちらの病氣も原因は身体の衰弱からくるもので、そのため養生として牛乳・鶏卵などをとり、なお饅店・肉店・西洋料理店などをのぞいていることである。子規の養生法は「食べること」であり「仰臥漫録」にもこれはつながっていく。この書簡では又「病体を維持」するために

故郷から母・妹を招いて共に暮らそうかと思うがどうかと叔父に相談している。東京で一家を構えることについて述べられた最初の書簡で母を見る、というより自分の病気をみてもらいたい、という気持ちからあることが知られる。」

⑦小生脳病に付てはいたく御心配かけ相すまざる儀にて御座候。小生脳病とは申しながら朝に晩に痛い痛いと申す方の痛みにては之無く、只々神經病的の脳病にて候へどもそれも此頃は大いによろしく候ゆえ、御安心下されたく候（明治二十五年五月十六日 河東秉五郎宛）

〔河東碧梧桐（秉五郎）は、故郷松山における後輩で明治二十二年子規が帰郷したさい、「ベースボール」を教えられ、又、翌春から子規を師として発句に専念する。同級であった高浜虚子も碧梧桐を介して子規に紹介され、二人はその弟子として教えを受けることとなる。この書簡も「脳病」について報じているが、弟子に心配をかける位の「脳病」というのだから相当な「神經病」と思われる。〕

⑧さて小生二三日前より子規病再発、もつとも軽症ゆえ、はなはだ軽蔑致しをり候ところ、今以て痰血やまず、今日は昨日に比すれば少し甚だしきの傾あり。ために閉口つかまつり候。もつとも辺土の事ゆえそこらあたりに、ろくな医者もなくいまだ誰の診察も受けず候。風流もやや心細きものと存ぜられ候。秋風やおぼつかなくもほとどぎす（明治二十五年九月九日 藤野潔宛）

〔藤野古白（潔）は子規より四才若い母方の従弟で、子規は上京した明治十六年の秋から十七年にかけて古白の父、藤野漸の家へ寄寓した。この書簡は「子規病」の再発を報ずるもので負けん氣の中にも心細さや不安を抱いていることがわかる。〕

⑨小生昨朝より少々痰血（もつとも軽し）の氣味あり。それさへ少々痰が薄紅になる位にて午前に四五塊を吐く位

の事ゆえ、決して御心配されまじきよう願い奉り候。又外へも御漏らし下さらぬ様願い奉り候。右ゆえ一両日奔走を見合せをり候、なほ甚だしければ医者にも見せ申すべきつもりゆえ、見せたらば医師の診断は早速御報せ申し上げるべく候へども格別の事にては御座無きと存じ候（明治二十五年九月十日頃 大原恒徳宛）

⑩小生帰郷後例の始末に付き大奔走中のところはからずも肺患にかかり、始めは押して歩行も仕りしが昨今はまずまづ臥褥まかりあり候。肺患といひたるは誇張のみ。ただ痰に多少の血痕を印する位なれば、咽喉だか何だか分り申さず候。もつとも医者にさへ見せぬ位なり。（明治二十五年九月十一日 高浜虚子宛）

〔明治二十五年九月は喀血発熱等で苦しんだ時である。しかし医師にもからず「肺患」かもしだぬという不安を隠し、強がりを言つてはいる。〕

⑪小生帰郷後取りあえず病氣に相かかり候ところ、今はまず本復の体なり。ことによれば本月末か来月始め頃転地療養に出掛けるかもしだす。もつとも転地と申しても七日か十日位なり。貧も又苦哉。^{くかな}（明治二十五年九月十七日 河東秉五郎宛）

〔結核に対しては「転地療養」というのが当時の一般的な治療法で、医師もそれを勧めた。しかし、それには金もかかる事であり、貧しさを嘆いてはいる。〕

⑫大蔵事務（＝送金してくれたこと）に付きては種々御面倒をかけ候段恐れ入り候。せつかく、御送致下され候ゆえ思し召しにあまへて當大磯へ出掛け申し候。この地は先年來、たびたび首出し候ひしところゆえ、何か目さきの変わつたところと存じ候へども、病氣の為には松林が宜しと申し又余り不自由なところも保養になるまじくと存じ又々ここに相定め申し候。（明治二十五年十月三日 大原恒徳宛）

〔叔父の大原恒徳から金を送つてもらい、それを資金として大磯で保養していることを告げる書簡。大磯には明治

二十五年十月三日から十月十七日まで滞在した。」

⑬小生本月初めより当地へ来り、贅沢に愉快なる日を送り申し候。もつとも口実は養生なれどもその実、多少の仕事に参り候わけなり。仕事といふも自分の仕事ならば内（＝家、東京の自宅）に居てたくさんなれど人よりの依頼は内に居てはどうしても出来申さず候。何となれば内に居ては自分の仕事ばかり従事致し候ゆえなり。今一週間程は滞在のつもりに候。（明治二十五年十月三日 河東秉五郎宛）

「保養のために大磯に行つたがそれは口実で、仕事のためであつたという。その仕事とは漱石と共に坪内逍遙を訪ねたことが縁となつて「早稻田文学」に原稿を依頼されていたことの他にまとまつた俳論を書いたり（すでに六月から「獺祭書屋俳話」を連載していた）、紀行文を書きたい（子規はこの時期には詩人＝俳人たらんとする決意を固めており、「花鳥風月」の世界を求めていた）などといったことであつた。この書簡は保養先で仕事に専念していることを報ずるものであるが、仕事のために出かけたというのは負け惜しみであつて⑧以降の書簡が示すように病状も悪化していたのである。」

⑭陸氏のいふ所は「私病身なれば家族を呼び寄せて出来るだけ力をつくすがよからぶ。それに付きて要する生計費は、どうか工面のつかぬ事はない」とかよう注意致しもらひし候ことゆえこの場合において移転費さへ出来るならばその説を採用せぬは陸に対しても親切に背く様に存じ候。又当地生計は陸氏が引き受けるといふからは、この人は一語一語の然諾（＝可否）をさへ容易にする軽薄の人物ならねばあてにする方がかえつてその人を信ずるの厚き所以にしてよろしかるべしと存じ候。（明治二十五年十月二十二日 大原恒徳宛）

「病弱な子規を看護するためにも母と妹を故郷から招いた方がよい、その生活費は日本新聞社員としての給与で何とかなる、という陸羯南の助言を受けたことが報じられている。母や妹を招くことについては前にも考えていたこ

とあつたが七月に学年試験に落第、退学を決意し、日本新聞社の社員として働くということでそれが一層現実的なものになっていくわけである。この書簡の現物は三メートルにも及ぶと言われ叔父に今後の方針について相談したものである。具体的に言えば今後の生活についての助言もさることながら、転居等に要する金銭的、援助を求めているということである。」

⑯私も病氣段々よくなり候。もはや平常に戻り候ゆえ天氣のよき時は外出の許可も得たれども何分このごろは寒氣強きため引きこもり居り候。四五日目に病氣はよくなり候ゆえその節もはや服薬もやめんかと存じ居り候ところ、医師来たりて、この病氣は今にして根を絶やすんばゆしき大患にもなるべし。必ず必ず用心怠り給ふな、といふゆえ用心とは何事にやと問へば葡萄酒飲むことと、滋養物食ふことと、あまり勉強せぬことと、長く服薬すること、といふに当たり前の事ながら今更に驚きたる心地に御座候。医師は又話をつぎて毎日出社せらるればこの後も折々は我方にして容態を見せ給へとて去り申し候。何しろ、この医者は常に陸などとの交際も之有り候ことゆえ一旦病氣快復したりとて他人顔にもならぬことに御座候。（明治二十六年二月二十五日 大原恒徳宛）

〔症状さえおさまれば治つたと考えがちな、病氣について楽観的な態度が伺われる。又、結核という病気がストレートに進行するのではなく、緩慢に進行する病いであることも知られる。医師はそれを知っているからいろいろと助言するが、当人は有難めいわく、義理でみてもらつて いるような書きぶりである。〕

⑯愚生病氣は例の通りなり。昨秋診察を受け候と同じ者に候。はじめは少々に急激に來り候へども全快も亦急激に候ひき。もつとも、この度は早速医師（宮本仲）の手に掛り、今に服薬まかりあり候。前月は十一日以後全く臥褥仕り候ゆえよほど勉強はでき申し候（医者には内々）。命さへ縮まらぬものならば一年に二度位はこんな病氣之有りたく候。血痕跡を絶ち候あとは褥中において愉快に堪へざる時、これあり候ゆえ、そのよし相話し候へば新海

(『新海非風』)は苦笑致しをり候ひき。しかし後には訪問者無きため少々無聊ぶりょうを感じ候。この間、あいにく訪問してくれたる人は内藤翁(『内藤鳴雪』)、一両度のみなり。談話さへして居ればあまり働かぬゆえよけれども人が来ぬ以上は写本より外に小生の仕事はこれ無きために始終肩のつかへやむ間は、こればかりは閉口仕り候。医師は小生に勧めて今の内養生して早く跡を絶たずんばゆゆしき大患にも立ち至らんと申し候へども金のいることばかりにて困りをり候。今日のところ、小生一家の経済はとても薄給の供給にて立ち難きところなるに國もとの方も彼是財政困難の由、申し來たり候次第。覚えず愚痴をこぼし候ように相なり候にても御推察下されたく、実は病中無聊ゆえ書信の往復でも幾度は存じ候へども前月などは十四五日より後は一家ほとんど空虚にて郵便代(『切手代』)に差し支え候次第。御閑察れんさつ之れ有りたく存じ候。それ故貴兄のみならずどことも御無沙汰致し候。(明治二十六年三月一日五百木良三宛)

〔命さえ縮まらないなら年に一・二度はこんな病気になりたいとか、喀血のあとは精神的に「愉快」だとか、病床にあって客のないのが退屈で困つたものだなどとのん気なことを言つてゐる。宮本医師は心配し、養生を勧めるがそれも金のかかることだと、とうところから一転して貧しさを訴え、薄給の上、叔父からの援助も期待できず、母・妹をかかえての病人暮らしで切手代にも事欠く有様だと嘆く。母・妹を東京に招いたのは明治二十五年十一月からであった。病気の時には、これで安心できるようになつたものの、経済は楽ではなかつたことが察せられる。〕
〔さる七日頃より頭痛の氣味八日も同様、外出して帰宅後熱度増進の模様ゆえ夜九時頃より臥褥、終夜頭痛激烈、困難仕り候。翌九日も終日終夜頭痛やまず。十日の日にはもはや熱氣相退くべくと存じ候に、なかなか退かず。夜に入りて非常の熱に相なり申し候。暮れ方よりは寸時も冰嚢をはなさず、万一脳炎にもやと存じ候まま、一刻も打捨ておくべからずとて夜半、医師を聘へし(『招き』)候ところ、医師來りて、熱の高さといひ胃のわるさといひ容体

甚だわろし、用心し給へ。今夜服薬なさる方よろし、との言により夜半車屋を使いにして薬を半里の外に請ひそれを服して忽ち寝入り候。翌朝に至りさしもの熱ことごとく去りて平常の如く実に不思議に存じ候。この日何の事もなかりしに夜寝られず。翌十二日も朝は何の事なく午後三時ごろより寒氣戰慄後熱発して夜半に到り候ゆえ瘧(むこり)（＝間欠熱の一つで隔日又は毎日一定時間発熱する病気）と存じ候。後に医に聞けば初め診察した時は脳膜炎か肺炎かチフスかになるべしとて氣遣ひしとなり。まだ充分には分らねどもまづ瘧と定りし様なれば安心に御座候。今度の病氣程苦しみたることは今迄御坐無く候。このごろの天氣とて毎日毎日雨降りやまぬにラムネとか氷とかのために一日に何度も母様を労せしことかわけもわからず候。急に下女を置くことも出来ず、頼もうにも人はなし、ほとほと困じはて候。今度の病氣も実は前月インフルエンザの余勢去らずして常々うつうつと致し候虚へつけこみ候ものと存じ候へば、瘧にしても後の弱り強かるべくと存じ候。もし御工面の都合により御送金願いたてまつり候。（明治二十六年六月十三日 大原恒徳宛）

〔発熱頭痛のためにかなり苦しんだ様子が伺われる。瘧とは昔の病名でマラリア性の熱病であり、インフルエンザのあとうつうつとしているすきにつけこまれた、と病氣を人間的に表現しているのが面白い。この病氣のため母に迷惑をかけていることを気にしているが、妹について一言も書かれていない点も興味深い。〕

⑯幾度か芳翰(ほうかん)（＝御手紙）拝見致し候とか存じ候へども病中又は病後にて御返事も致さずと存じ候。ひらに御詫申し上げ候。高浜若し帰郷候はば小生の事大方御聞き取りと存じ候（先日高浜へ一書差し出おき候ゆえ）。約言すれば瘧は落ちて身体衰え、そこへ少々の気管支炎に悩まされ候次第に候。もはや医師に許されてさる十九日東京出立紀行はいづれ新聞に載せ候ゆえ、それで御覽下されたく候。（明治二十六年七月三十一日 河東秉五郎宛）

〔病状がおさまるともなく子規は「地方俳諧師」を尋ねるべく東北地方を旅する。七月十九日に出発して東京につ

いたのは八月二十日であった。この書簡は旅先の郡山から出されたもの。「名句は菅笠をかぶり草鞋を着けて世に生まるゝものなり」とこの後で書いているが、病後のこのような旅は健康面から考へるなら無謀と言わざるをえないものだろう。」

⑯さて私さる頃申し上げ候通り、奥羽漫遊に出掛け候へども、とかくにはかどりかね、やうやう昨夜当地着つかまつり候。これより羽後の象潟を一見致し候上、盛岡にいで再び汽車にて帰京するつもりに御座候。旅行少々病氣にかかり養生かたわら仙台には一週間ばかり滞在つかまつり候。病氣と申しましても別に何病いふでもなく、ただただ身体疲労して朝も昼も夜も無闇に眠たきばかりにて、隔日位には午睡もいたし大いに体力を養ひ候ところ、甚だ健壯に相なり仙台を出て二日ばかり山路を辿り、現に昨日は下駄ばきにて九里の道をありき候へども足こそだるけれ、身体には申し分御座なく候。しかし途中用心して日中は茶屋に休み、さなくとも二里三里ばかり行けば必ず一時間ばかり休息することに定めをり候。（明治二十六年八月七日 大原恒徳宛）

〔これは旅先の羽前（山形）北村山郡福岡駅から発せられた書簡であるが病弱の身体ゆえ難儀の旅でありながら意氣軒昂な精神が伺われる。又、この通り、休み休みの旅であるから途中の「茶代も馬鹿にならぬ」わけで叔父に送金を依頼している。〕

⑰愚生（＝私）財政困難のため真正の行脚と出掛け候ところ、炎天熱地の間にむし殺されんづ（＝むし殺されそうな）勢ひにて大いに辟易（べきえき）（＝閉口する）し、この頃は別仕立ての人車（＝人力車）追ひ通しに御座候。風流は足のいたきもの、紳士は尻のいたきものに御座候。喘ぎ喘ぎ撫し子の上に倒れけり。（明治二十六年八月十六日 夏目金之助宛）

〔行脚の旅は子規の肉体を苦しめたに違いないが、それをユーモラスに表現している。金がないため徒步の旅であ

つたが、足を痛めて歩けなくなり人力車をやとつた、それを「紳士は尻のいたきもの」と言つてゐる。」

㉑大兄御病氣如何に候や。小生この頃頑健に相なり日々俗事に従事まかせあり候。(明治二十七年三月三十日)

大谷藤治郎宛)

〔明治二十七年は子規の病状が比較的良く表面的には平穩な時期であった。ここにいう「俗事」とは「小日本」の編集のことであろう。「小日本」はわずか数カ月をもつて廃刊となる。〕

㉒小日本ついに廃刊と相なり残念に存じ候。廃刊後直ちに日本へ移り候につき一身上の繁忙は同じことにて暑中一日の休暇さへなく候へども責任は多少減じ荷の軽くなりたる心地致し候。近來頑健に赴き候は何よりの仕合せに御座候。健康はとかく金と相伴ひ申し候に付き少しにても余計に金を伴ふだけ健康に相なり候。病氣の時はいつでも金のなき時に限り候。呵々。(明治二十七年七月二十四日 大原恒徳)

「「小日本」は廃刊となつたものの健康にも大分自信のついた気配が伺われる。」

㉓御病氣とかく御すぐれなされざる由、さぞぞ御困却と存じ候。御身の上承り^{うけたまわ}、御心中察し入り候。小生貧家に生れ殊に身体虛弱なるために常に不自由がちに相暮らし候へども天運の廻り合せよく、さまで(=さほど)難儀も致さず。人の金で学問してようやく今日までこぎつけ申し候。病体についても一時は自ら神經をいため候へども大患後は全く相あきらめ候ように相なり候。世界を大観し、心胸をひろくし不屈不撓(=困難にあってもひるまず、くじけない)の精神を以てどこまでもおふちゃくに(=ずうずうしく)世渡りすること肝要と存じ候。不遇のために厭世的思想を起し、轢転(=不遇・不運)の間に不幸を歎するは悟らんとして未だ悟らざる者と存じ候。世道日に危ふく、人事月に非なり。我に於て何があらん。(=世間は日一日と危険になり、人間は月一月と悪くなつてゐる。しかし、自分にとつてそれが何だらうといふのか——自分は自分の道を行くだけである)彼は彼なり。我は我な

り。不遇歎するを用ひず、不幸愁ふるを要せず、磊々落々として（＝気が大きく細かなことにこだわらない）一世を終ふ（＝人生を終える）これ、わずかに悟る者なり。不遇を不遇とせず不幸を不幸とせず是非を一にし、吉凶を等しくして（＝良いことにつきあっても良くないことにあっても、幸福にあっても不幸にあっても態度を変えないで）自らこの俗界に立ちて己レノ素志ヲ貫ク者、即ち大悟徹底的の人物（＝悟りをひらいた人物）以てともに談すべきものと存じ候。（明治二十七年九月十日 石井祐治宛）

〔石井露月（祐治）は秋田の人で子規のもとで「小日本」の記者として働いた。この書簡は当時、脚氣で苦しんでいた石井を励ますものであるが子規自らの心境がそこには強くにじんでいる。病苦と戦つて厭世に陥らず、男らしくたましく生き抜いて大業をなしとげ子規の面目躍如たる文章でその力強さに心打たれる。石井はこの書簡を読んで「胸の中何故とは知らずかきむしられるように覚え、ひとり暗然として泣かんと欲したことがある。庭前の虫の声は女々しき自分にも似、ゴウゴウと遠き波の音は己レノ素志ヲ貫クと言はれた子規君の聲音とも聞かれるのであつた」と感想を記している。〕

④私も昨年来病氣知らずに相過し候間、憚りながら御方慮（はばかり）下されたく候。（中略）さて私今度は新聞記者として従軍いたし候ように相成り申すべくと楽しみをり候。方面は未だ何れとも決定致さず候へども大概、大坂師団に附随致すべしと存じをり候（中略）昨年来雄心勃勃として（＝さかんにわき起つて）禁じがたく候ひしかども第一は寒氣を恐れ、第二は他に望み手、之有り候ひしゆえ、さし控えおり候。今日になりてはもはや寒氣も知れたものに相なり且つ従軍者拵底（あつて）（＝底をつく、なくなる）に相なり候ゆえ、志願致し候。（明治二十八年一月九日 大原恒徳宛）

〔前年の健康状態に自信をつけ、従軍記者として勇み立つ気持ちを述べたもの、体調がいいとすぐ自信をもちがち

なのは人の常であろうが、ここにも子規のそのような若さが伺われる。」

㉕ 小生還附地より帰船の途次、宿痾（＝持病、結核のことである）再発、もつこん（＝現在）、神戸県立病院に入院まかりあり候。逐日（＝しだいに）快方に向ひ候間決して御焦慮あるまじく候。全快の上は保養かたがた須磨辺りへの居住のつもりに之有り候間、その節、御来遊ありてはいかがや。（明治二十八年六月十九日 大谷藤治郎宛）

〔日清戦争の従軍記者として中国に渡り、その帰国途中の五月十七日佐渡國丸の船中で喀血し、二十三日神戸港に上陸後直ちに入院した。そのことを報ずる書簡で看病人に代筆させたものである。〕

㉖ 小生近衛に従い金州迄まかり越し候へども一の砲声を聴かず、五月十日に同所出発、帰路につき十四日大連湾より乗船、十七日船中にて喀血を始め候ところ、何の手当ても出来ず、且つ消毒とかコレラ患者とかの騒ぎにようやく和田岬検疫所を放免させられたるは五月二十三日なり。（船を上りしは同日朝）それより釣台にて直ちに神戸病院に入り今日迄すでに四十余日に相なり候。今度は前年に比すれば甚だしく喀血、前後二十日間に渡り申し候。自分はそれ程にもなかりしが傍らの人いたく心配して鳴雪などはもはや小生を以て地下の人とせられ候ひととしか後にて聞き及び候。この頃はますます快方に向ひ、やうやう足を出して座る事と腰かける位の事は出来申し候。しかしまだ一步も歩け申さず候。何しろ、この頃は談話が出来だして一番うれしく御座候。只今は母も來たり碧桐虚子も看護のため來神（＝神戸に來た）致しをり候。貴兄には早く御目にかかりたく、病中も常にいつ頃御帰郷なるやなど気にかけをり申し候ひし程なれども、貴兄の御帰郷頃には退院して松山に配所の月をながむるか須磨あたりにふくるしぐれをや愛づらん、そこらは未定に之あり申し候。右御承知下されたく候。もしめでたく広島へ御凱旋の節は日本新聞社迄、来着の由御發電（＝電報を打つ）下されたく候。（明治二十八年七月六日 五百木良三宛）

〔五百木瓢亭（良三、犬骨坊）は松山の人で「筆まかせ」に「医者兼文学者を以てシルレルを氣取りたる在京の五

百木氏より手紙来る」（明治二十三年）とあるように、医師の資格をもちながらこれを業とせず俳句にうち込み、後政界で活躍「日本新聞」を主宰した。シルエルはドイツの詩人、劇作家ではじめ法学と医学を学んだ。シラーと表記されることが多い。この書簡は「衛生隊」の一員として出征している瓢亭にあてたもので自分の帰国後の病状を報じたもの。」

㉗私病氣だんだん快方に相なり昨今は室の内外の散歩雪隠（＝トイレ）の往来位は容易に覚え候。今日は久しぶりにて髪を斬り髭を剃り心地すがすがしく愉快に存じ候。医師の許可あらば明日頃より庭内の散歩はじめたく思ひをり候。右の次第ゆえ、あるいは退院も存外早きかれも知れずと楽しみをり候。社よりは当月分日当例の如くよこしぐれ候へども（＝給与を送つてくれた）それにては今月末迄はおぼつかなく候。ついては右御心配相煩わせたく願い上げ奉り候。いくら入用なるかは分らねども二十円あらば無論大丈夫に御座候。これは只今入用と申すには之なぐれ候へども（＝すぐに必要だというわけではないが）あらかじめ申し上げおき候。右の金子あらば在院退院、どちらにても今月中は不都合なきつもりなれども退院後の模様はいよいよとは分かり申さず候。いづれ今月中に退院のはこびに到り申すべく、来月になりて須磨あたりの滞在費についてはその節御相談申しあぐべく候。少しよくなれば、いつたん帰郷仕り、拝顔の上御相談致したく存じをり候。（明治二十八年七月十四日 大原恒徳宛）

〔入院するということは特別に金もかかることであるから、その金銭的援助を叔父に仰いでいる。この書簡は神戸病院から発せられたもので、故郷松山も近いから退院したら相談のため帰郷したいと告げている。この年、友人漱石がたまたま松山中学校の教師として赴任しており、子規はその下宿先に八月末から十月下旬にかけて、仮寓し連日のようく句会などを催すことになる。〕

㉘小生病患に付ては種々御配慮に預り候ところ、ようやく退院の許可を得て当地に來り申し候。自分は死ぬるとま

でも思はざりしが医者さへ氣遣ひしと聞きては今更のようにおぼえて半ばうれしく半ばは恐ろしく、はては老耄人（＝ぼけ老人）の如くつまらぬ事に心配致し候やうに相なり候。

夏瘦の骨にとどまる命かな

この間の消息

は碧梧虚子くはしく承知なれどもその実は兩人の思ひをり候よりは更にはなはだしきもの御座候。碧虚など看護致

しぐれ候後は一時間でも人が側らに居らねば心細く覚え候こと、しばし之有り、したがひて兩人の顔を見る時は我が子にでも逢ひし時の感なるべしと思ふ様の感起ること之有り候。それに比べれば入院当時の勇気は我ながら偉きものにて、看護一人さへあれば畳の上に死ぬるには十分なりと定め虚子の京都より電報せし時すら呼び寄せる考へは毫もなかりし（＝少しもなかつた）位に御座候。おまけに四畳敷きの天地に押しこめられてしかも寝床の上を離れえず天井をなめて呻吟する。それをさへ船より上りし身は極楽かとばかり思ひ候。それを思へば今の老耄は實に恥ずかしく存じ候。しかし病氣の少しづつよくなると共に勇氣もやうやうに回復し、今では高浜なくともさまで淋しあとは思はぬように相なり候。ただ勇氣の全然回復するや否やはおぼつかなく候。この点、一生の遺憾に之有り候。今日の如き無氣力にてはこの後たとひ何年生きたりとも何事も出来申すまじく候。この点よりいふも長く田舎に閑居して遊び居るはかえつて悪く、やはり都門に住みてはげしき競争の風に吹きまはざる方が元氣付くべきやと存じ候。（明治二八年七月二七日 内藤素行宛）

〔内藤素行（鳴雪）は常磐会寄宿舎（東京在住の松山藩の師弟を収容する寮）の監督で、子規よりも二十才年長であつた。漢詩をよくしたが、俳句の方は子規が先生で、この寮に俳句熱をもたらしたのは子規であり。この書簡は神戸病院から須磨保養院に移つてからのもので、この文面の後に鳴雪の作った句に対する批評と、自分の句が並べられている。神戸病院に入院した当初はずい分「勇氣」があつたものの。しだいに気が弱く心細くなつて虚子や碧梧桐が見舞いに来てくれた時は、我が子に会つたようなうれしさを感じた。しかし病氣の回復と共に又「勇氣」も

回復してきたという。病いの末にあって人との交情を求める気持ちの深さと自らの「無気力」をいましめ「勇気」を奮い起こそうとする敢闘精神は最晩年の子規の心に通じるものである。」

㉙愚生病氣につきわざわざ御慰問に預り有難く存じ奉り候。おいおい快方に赴き候間、憚りながら御放慮是れ祈り候。御恵投の狂歌時とりて面白く拝誦致し候。つれづれのあまり我もひそみにならほん（＝まねをしよう）などとおこがましく候へど実は初学のうゐうゐしきところ、幾重にも御引立の程願い奉りあげ候

病中

一声は死出たおさの田長か極樂の道はと問へど二の声もなし（＝一声は死出の道へと案内するほととぎすの鳴き声であるか。極樂の道はと尋ねたが、次の声は聞こえなかつた結核の徵候があり死ぬかと思われたがそれだけで終わつた）

須磨に病をやしなひて

夏の日があつもり塚に涼み居て病氣なほさねばいなじとぞ思ふ（＝夏の日の暑いさ中、敦盛塚に涼んで、熊谷直実のその「なおざね」ではないが病氣を治さないうちは出まいと思うことだ）

病の少しくおこたりそむる（＝治り始める）と共に養生もおのづとおろそかに（＝いいかげんになつて）人の忠告も聞き捨てがちなるこそおぞましけれ（＝愚かなことだ）

横にふるかうべの里を立ちいでて又こりすまに鳴くほととぎす（＝横にふる頭こうべ、その頭ではないが神戸を出て再びこりることもなく須磨ではほととぎすが鳴いたことだ—喀血があつたことだ）

この頃の雨天つゞきに氣もむすぼれて（＝ふさいで）とけぬ折柄かかる御消息（＝御手紙）のうれしく覚えて閑居（＝ひまな状態でいること）の心をなんなくさめ侍る

お手紙の狂歌あすかとまつ風にまた日数ふる村雨の空（＝お手紙に添えられた狂歌、その狂歌ではないが今日か明

かと待つてゐるが、手紙は来ず、松風に幾日も降つてはやむにわか雨の空を眺めていることだ）（明治二十八年七月二十九日 西松二郎宛）

月二十九日 西松二郎宛

〔西松二郎は東京大学卒業の理学士で、芳菲山人又は芳菲坊と号し狂歌を作つていた。その狂歌師にあてた病氣見舞いに対する札状で自らも狂歌で応えたものである。「うふうふしきどころか立派なものなり。これらは所謂かくし芸であろう」と西はその回想の中で述べている。「死出の田長」はほととぎすの別名で、死の道を案内するものの意。「夏の日の」の歌は、平敦盛の「敦」に「熱」をかけ「治さねば」に「直実」をかけたもの。「横にふる」の歌は「神戸（病院）」に「頭」をかけ次の保養先である「須磨」を「こりずま」と掛けて詠み込んだもの。「お手紙の」の歌は、狂歌を添えた見舞状を受け取つたことを折り込んで「今日か明日か」としたもの。西芳菲の見舞状——明治二十八年七月二十六日——には　ほとときすいく夜心にかけたかとたつた一声問ふてくれかし

時鳥須磨の浦ではなけれどもなれをまつ風村雨の空　敦盛の昔の跡に声かけて鳴くやしろの山ほととぎすなどの狂歌が添えられてあり、これに自らも狂歌で応じたものである。西芳菲の狂歌は「病床六尺」の一番最後——子規が生涯の最後に書いた文章にも出てくる。」

⑩病氣おいおいによろしく五町や十町の散歩は自由に出来申し候。坂道は少しにても苦しく二階段でも思ふようにはあがれず候。食事は大いに進み昼飯の菜は毎日牛鶏肉の内といたしまく喰ひ申し候。肴には全く飽きはて何の味も之なくそれには困りはて候。（明治二十八年七月三十日 大原恒徳宛）

〔須磨保養院での生活を叔父に報じたもので、病状と共に食事のことが報じられているのは後の「仰臥漫録」につながるものである。」

⑪小生帰国船中より発病し神戸病院にある事二ヶ月。やうやう少し元気つきて先日当須磨へ來り申し候。今度は二

度目といひ発病後手当のゆき屈がざりしといひ一ヶ月仰臥不動の姿勢を保ちしことと言ひ、かたかた以て身体の衰弱甚だしく、物事に頓着したり、心配したりする迄に老耄致し候。三度目は仏の面となるべくと存じ候ゆえ、用心専一とへこたれ申し候。入院中は時々大兄の事をいひ出て例の無邪氣なる咲笑を聴きなば病氣も直ちに癒ゆべしんだと碧梧虚子に申し居り候ひしが、やうやう御御帰着安心致し候。（中略）又話し相手がなくば夏目金之助（二番町横町上野義方内宿）御訪問なさるべく候。右は中学校教師として、只今赴任致し居り候。（明治二十八年七月三

十日 五百木良三宛

〔五百木瓢亭（良三）は中国から無事凱旋帰国したがそれを喜ぶと共にあわせて自分の近況を報ずる書簡。「用心専一とへこたれ申し候」とはいかにも子規らしい負けず嫌いのユーモアが伺われる。又「無邪氣なる咲笑」を聞けば病氣も治るというのも楽天的で明るいその性質を示している。瓢亭は帰国して松山に戻っていたので友人の漱石に会うように勧めているわけである。〕

〔小生宿痾につき種々御配慮に預り鳴謝（めいしゃ）（＝感謝）奉り候。頃日（＝近ごろ）快方よろよろと致し居り候。しかしその昔の吾にはいつ復するや分らず、老木の大枝が折れた位の事と思召し下されたく候。再び新芽を吹く気遣ひも之無かるべく候。（明治二十八年八月二日 石井祐治宛）

〔石井露月（祐治）は日本新聞の社員。この病気が自分にとって決定的なものであることが苦いユーモアのうちに表現されている。〕

〔八月三日御認めの御書簡拝見致し候無事帰国の段何より畠み重ねて（＝幾重にも）可賀の慶事（＝祝うべきめでたいこと）に候。しかし予備病院付になりしとか。国家のためながら御氣の毒に存じ候。御帰國の事承り候や否や先日貴兄宛に御宿もとまで一書差し出し候ところ、昨日尊大人よりはがき到来、御滞広のよし承知致し候。小生

病氣はもはや六分通り回復致し候。（中略）。小生病氣うつうつとして樂しまず、しきりに胸中のうつうつを取りて他人の頭上にそそぎ去り、わずかに慰めをり候次第につき貴兄の一笑を得て幾年の寿命を延べんと樂しみをり候ところ、御書面の趣にては貴兄の胸中さへなほ不平の塊盤屈（＝めぐりまがる）致しをり候よし、是非もなき世の中に候。　うき事のなほこの上につもれかし限りある身の力ためさむ　とかいふ古歌ありしと覺ゆ。いづれ前世の業因はつる迄は百難千苦もあるべく候。（明治二十八年八月五日　五百木良三宛）

〔五百木瓢亭（良三）は明治二十七年七月から翌年七月にかけ「衛生隊本部」の軍医として朝鮮、中国に渡った。帰国後病いを得て広島の病院に入院。この書簡は広島に出したものである。国事の勞をねぎらうと同時に自分も病氣ゆえに再会を楽しみにしていたのに、と述べ同じ病者として慰め励ましている。「胸中のうつうつ」を他人にそいで「慰め」ているというが、子規にとつて病いは友を求め、人のつながりを深めていくことであった。〕

④小子去る二十日須磨出立、岡山へ一泊、翌日広島着、二日滞在瓢亭と旧を談じ申し候。瓢亭例によつて健全、何のかはりも御座なく候。それにつきても変り果てたるは小子の容貌。何分にも、今御目にかかるは恥ずかしき心地いたし候。とは言え彼は炮煙彈雨の中に一命を全うして帰り、我は百病千癇（＝沢山の病氣）の間になほ三寸の息をつなぐ（＝助かつた）思へば夢の如き再会に話すべき事もとみには思ひいです。秋風や生きてあひ見る汝と我とばかりに相別れ申し候。それより帰郷の舟中はげしく揺られ候ためにや、その時はさしたる障もなく体温も平常なりしが着松（＝松山に着く）後とかく頭痛がちにて起居不自由に暮し居り候。さりとて前よりわろき程には御座なく候。（明治二十八年八月二十九日　内藤素行宛）

〔常磐会の監督であった内藤鳴雪（素行）——東京在住——に共に寮生として過ごした五百木瓢亭との再会を報じ、自分の帰郷のこと、病状のことを報じた松山からの書簡。俳句には深い感慨がこもっている。瓢亭も従軍で病いを得

たとは言え、さ程のものではなかつた。しかし子規にとつてこの従軍が以後の生涯を苦しめることになる。その予感が伺われる。」

⑤肋骨はついに足を裁断致し候ひしよし、氣の毒に存じ候。「日本」へ画稿を寄せし千谷某も病死のよし、かへすがへすも戦争の勝利に対する租税は高きものに御座候。拙寓(=自分の部屋)は夏目金之助の寓居の一室に御座候。毎晩三四人俳士来集連座(=多人数集まつて一定の題のもとに句を詠みそれを互選する会合)を催し候。初心ながら熱心のほど感じり候。貴兄帰省はかなはずや、共に一會やりたきものなり。(明治二十八年九月八日 五百木良三宛)
〔勝利とは言え、戦争の傷あとの深さに感慨をもし、あわせて漱石のところに仮寓し句会のリーダーとして活躍していることを報ずる書簡。佐藤肋骨(安之助)は陸軍少将でこの書簡にあるように征台の役で右脚を失つた。近衛聊隊時代、瓢亭や非風らと共に句会に参加し子規の教えを受けた人物である。〕

⑥小生その後おいおい健全に赴きをり候ところ、ふと逆上の結果、鼻血と相なり二三日間難儀致し候へども四日目よりは全く相やみその後はただ用心のため臥褥致し居り候。もとより医師両人に診察致し候。今日は大分よろしきゆえ起きて手紙などしたため候。帰郷の途次は御地へ立ち寄り申すべく本月十日ごろにも相なり申すべく候。帰郷後先日病気にかかる迄は毎日俳友数人つめかけ連座付合(=連歌・俳諧で句をつけること。五七五又は七七の前句に七七又は五七五と付けていく)等にて夜半迄相つとめ候。それも逆上の一因なるべく候。(明治二十八年十月二日五百木良三宛)

〔この書簡をみると漱石のもとに仮寓している時も病床に臥していたことがわかる。「鼻血」はおそらく結核からしたものだろうが、子規はそれを「逆上」—句会のもたらす精神的な興奮によるものとしている。この時の鼻血は三日間ほど続いたというが文学活動と病いが一体のものとなつていく晩年の生活に通じるものがある。〕

③小生も大分よろしくなり候ゆえ、あづまの秋も恋しく須磨迄出稼ぎ候ところ、リウマチ（＝間接リューマチス。寒冷・湿氣などが誘因となり関節の腫脹、疼痛を来たし発熱を伴つたりする病気）にや、左の骨痛んで歩行困難に相なり候。当地にては全く動けぬ程なりしを服薬の効によりて今日は大分心よく相なり候。明日は少しは歩き得べきかと楽しみ居り候。（明治二十八年十月二十五日 河東秉五郎宛）

〔松山を発ち、東京に着く途中、須磨で左の腰骨が痛み出し、東京に着いてからは全く動けなくなつたことを報ずる書簡。リウマチであればと願つていたものの翌年三月脊椎カリエスであることが判明する。〕

④小生持病は少し快く先月（＝十月）三十日やうやう帰京致し候ところ、その後神經痛とか申すものにて足腰たたず、今に臥褥致し居り候。ことに数日来、感冒の氣味にて熱発し昨今は書見、写字もかなわず、不自由致し候。この夏は神戸か須磨にて御出会出来るべきやと小生も心待ちに待ち居り候ところ行き違ひて残念に存じ候。田舎稼ぎは御つらかるべくと察し上げ候へども貧乏人の病氣したのも随分つらきものに御座候。たちまちにして宿痾療治しつくすべき良法ありとも○がなければ何にもなり申さず候。小生はいよいよやけになり文学と討死の覚悟に御座候。（明治二十八年十一月二十四日 藤井乙男宛）

〔藤井紫影（乙男）は、東大で国文学を専攻した一年後輩にあたる人。子規の催す俳句会にも出席、明治二十七年十月福岡県立修猷館中学へ赴任。明治二十八年三月には子規から従軍の決意「愉快に堪へぬ」という文面に接し、思いとどまるように忠告状を出した。この書簡には帰郷後の臥病生活が報じられ、貧しさを嘆いている。しかし病気や貧乏にへこたれないで、それだからかえつて奮起する、「やけになり」文学に精進するという決意につながるのは第三期の文学活動を支えた精神である。「やけになる」ことは、自暴自棄になつてすべてを投げ出すことでなく、狂つたように一直線に突進しようとする勇氣であった。〕

(39) 小生病氣大分よろしく本月初めより出社致し、病後といひ多忙のため逆上甚だしく一昨日来半狂の心持にて奔走致し候。それらのため御返事おくれ申し候。ここに一つ御報道致すべき事出来申し候。单刀直入にては相わかりかね候につき、はじめより叙をおつて(=順序だてて)申しあぐべく候。小生が貴兄及び非風と交際致し居り候さい、貴兄よりも非風の方、文学上の才能ありと思ひ候ことはわずかの間にて、非風ややその正体を現はしけ候ゆえ、貴兄に遠く劣り候はもちろん、とてもものにはなれずとて一朝見捨て申し候。それと同じく碧梧虚子の中にも碧梧才能ありと覚えしは真のはじめの事にて小生は以前よりすでに碧梧を捨て申し候。しかし虚子はどこ(までも)原文には落ちてゐる)やりとげ得べきものと鑑定致し又、したがつてやりとげさせんと存じ居り、種々に手をつくし申し候。小生の身命は明日をもはかられぬもの小生の相続者は虚子と自ら定め置き候。しかもこの相続者のたしかなる事は小生自ら人を鑑定することの明を有せりと自ら恃み居りし心にて相わかり申すべく、小生はどこまでも之を信じ貴兄はじめ誰人もよく之を信じ申され候事と存じ候。しかし人間の知恵ほどはかなきものは之無く候。小生は今日只今二人となき一子を失ひ申し候。小生をして人を観るの明なからしめたる者は(=人を見ぬく賢明さがないと思わせたのは)實にこの一窮措大(=貧乏学生)高浜虚子に之あり候。もはや小生の事業は小生一代のものに相なり候。三十有余年だに保ち得べからざるこの一代にて相終はり申すべく候。小生はわずかに創業の功を奏したる俳句類題全集と共にその運命の短きを嘆じ申し候。小生頭脳中に葬られをはりし幾多の文学思想は水子ともならで闇から闇へ行き申すべく候。(中略) 非風去り碧梧去り虚子亦去る。小生の共に心を談ずるべき者唯貴兄あるのみ。前途は多望なり、文学界は混乱せり。源語は読了せしや如何。小説は如何。過去は如何。現在は如何。未来は如何。一滴の酒も喉を下らず。一点の翳^{えくぼ}も之を惜しむ。今迄も必死なり。されども小生は孤立すると同時にいよいよ自立の心強くなれり。死はますます近づきぬ。文学はやうやく佳境(=すばらしい境地)

に入りぬ。書かんと欲すれば紙尽く。喝ッ（明治二十八年十二月十日頃 五百木良三宛）

「文学を事業と考え、自らを創業者として任じ、その事業の後継者として虚子を期待するも、それが裏切られたことを告げる書簡。新海非風（正行）は常磐会寄宿舎で子規と同室で、共に句作に熱中、合作で「山吹の一枝」を執筆した。中略部分の内容を紹介すると虚子と道灌山に行き、本氣で文学者になろうと思っているのかと手詰てづめの談判をする。本氣でというのは「野心・名譽心」をもって文学的精進をするということである。虚子は文学者になる希望はあるが自分はそのような野心・名譽心を起こすことを好まず、好きでない学問までして文学者になろうとは思わないと答える。子規は虚子の「高尚」さ、「神聖」さを認めつつも、野心がなければ「零落れいらくし（=落ちつぶれ）」「乞食非人」となるかもしだれぬと怒る。子規と虚子には文学者となるについての意識の大きなズレがあつた。子規にとって文学者となるのは世間的な栄誉・名譽心とつながることであつた。虚子はこのような世俗的な野心をこの時もつていなかつたから子規のこののような考え方についていけなかつたのである。子規は、虚子の淡白な態度に逆上した。弟子に次々に裏切られというが、弟子は別に子規を裏切つたわけではなく、子規自らが勝手に弟子に見切りをつけたり、自分の考えを強引に押しつけようとしているに過ぎない。虚子にとって子規のこのような押しつけはうつとうしいものとも感じられたであろう。このような性急さ、強引さは子規の性格からもきているのだろうが、病いのため自分の築いた文学の事業が中途で挫折するとえたことも背景にある。「あとどれ程も生きられない。だから今のうちに事業を完成し、後継者も育てておかなくてはならない」という意識が性急な押しつけという形で表われているのである。この書簡には死を意識したものの激しいが伺われる。「裏切られた」という思いを抱いたものの虚子との関係はこれで断絶したわけではない。明治三十年一月、松山で「ほととぎす」が創刊されるが、それを翌三十一年七月東京に移し、俳誌として育てあげたのは虚子であった。又カリエスによる激痛にさいまれる

子規の病床を看護したのはその弟子達であった。子規は弟子に見切りをつけたりしているが、一人の弟子も子規を見捨てなかつたように思われる。」

⑩小生やうやく帰京致し候ものの、なかなか昔の小生にても之無く大いに弱り居り候。しかし病氣のために仕事をなまける事は毫も之無く候ゆえ、御安心下されたく候。近來は毎日二欄三欄位も書き続け申し候。帰京後リウマチスミたやうなものにて足腰自由ならず困り居り候。この上にもう少し世の中の苦を重ねて試みたく候。（明治二十八年十二月十四日 大谷藤治郎宛）

「虎子に説いた「大いなる野心」は病中の子規をたえず、休みなく仕事に駆りたる原動力であり、病中にあつても決して文学活動をやめようとはしなかつた。このことを伝える書簡である。」

⑪小生帰京後リウマチにて一時は困却致し候へども昨今大分よろしく候。ただ寒氣強き日に、やや、その度を増し候ゆえ少々つらにくゝ感じ候。しかし動きさへせねば痛くもなきものなれば黙つて俳句三昧に日を暮らし候には誠に結構に候。小生は病氣の二つや三つは、この頃平気に相なり候。ただいやなものは四百四病の外に之有り候。

（明治二十八年十二月十四日 大谷藤治郎）

〔病氣が重くなつても弱音をはかず「誠に結構」という、負け惜しみ精神がみられよう。〕

⑫愚生病氣につき御見舞下され有りがたく存じ奉り候。頃日大分よろしく相なり申し候。頃日閑暇といふよりもむしろ多忙には之有り候へども文学上の事ならば何時にも差し支え之無く候。玉詠も之有り候はば時々御漏し下されたく候。（明治二十八年十二月十四日 村上鬼城宛）

〔俳人、村上鬼城は聾者の俳人であり、日本新聞を通して子規を知つたのであろう。その見舞いに対する礼を述べ、病床での文学活動の意欲を伺わせる書簡である。〕

(3) 子規と脊椎カリエス——第三者の証言

従軍する迄の子規の症状は主として発熱・血痰・喀血といった呼吸器症状に限られておりその病状も断続的で表面的には健康に見えることもあった。書簡から察せられるのは一直線に進行するとはみえない結核という病気の緩慢な推移である。明治二十二年に初めて血痰を見、翌年最初の危機を自覚するが、小康状態が続き、明治二七年には完全に良くなつたと思っていたようである。しかし、明治二十八年の従軍記者として中国に渡つたこと、これを契機として病状は一挙に進行する。帰国途上の喀血、そして神戸病院への入院時は危篤状態にあつた。再び小康を得て、須磨保養院へ移り、退院後、故郷松山に帰省、漱石の下宿に仮寓した。そして東京に帰る。子規が腰の異常を覚えたのは明治二十九年の二月である。最初リューマチではないかと思われたが脊椎カリエスと判明。これ以後子規は足腰の立たない臥病生活を強いられる。脊椎カリエスは骨の結核である。肺結核からカリエスへの移行について、医師であり、歌人である岡井隆は次のように述べている。

「元来（子規の結核は）肺結核症として、肺にまず結核菌は巣くつた。明治二十二年五月喀血を見てゐるが、このあたりが自覚症状のはじまりだつたろうか。肺結核症は、やがて、血流のなかへ、菌をおし出すまでになる。肺の菌量も増えたのであるし、肺の組織の破壊も進んだのである。血流の中へ、おし出された菌は、流れ流れて、いろいろな臓器にひつかかり、そこに植民地をつくる。いわゆる血行感染である。肺にひろがつてもいいし、腎臓へ行つてもいいし、髄膜に行つてもいいのだが、ある人では、このんで骨へ行く。骨結核である。これをふつう、カリエスと呼ぶ。子規はもうものの臓器をやられていたにちがいないが、とくに目立つのは骨結核である。それも、もつともよくみられる脊椎カリエスであった。脊椎は俗にいう背骨。頭の方から呼んで、頸椎、胸椎、腰椎、仙椎となる。数珠玉のようにつながつた、これらの椎骨群は、人間の体の形態を形成する縦軸である。そして、その真

中に脊髓という神経組織を一本通しているのである。

カリエス *karies* とは骨が腐るという意味のラテン由来の言葉である。文字通り腐るわけではない。結核菌が骨の組織に寄生していくあらす。菌と骨組織とのたたかいの結果出でるのが膿である」（「正岡子規」）

医学的には以上のように説明される脊椎カリエスである。これが子規の生活にはどのような形で表われているのか、それを身近にいた第三者の証言によつて紹介してみよう。

はじめに「子規の回想」から紹介する。これは子規と同郷松山出身の俳人河東碧梧桐の書いたもので全編に子規に対する深い愛情、尊敬の念があふれており、子規について書かれた証言の中で最もすぐれたものである。子規は明治三十年三月と四月、二度にわたつて腰部の手術を受けているが、この手術がどんなものであったのか同書から引いてみよう。

①その三月二十七日（＝明治三十年三月二十七日）、佐藤三吉博士の手術があるというので、立会人に私が立たせられた。なるほど脊髓の中央部に腫物でもなければ、筋肉の膨張でもないエタイの知れない大きな隆起がある大山が出来たというのも、患者の感覚ばかりでもない、驚くべき贅瘤（＝大きな目立つ瘤）なのだ。当時天下無二の国手（＝国を医する名手の意で、名医をいう）の手術というのが、鋭く長い漏斗状をした銀色の管を、力に任せて贅瘤の肉へ突き刺す、無造作なものであつた。局部麻酔など進歩した方法も無かつたのか、患者は身を震わして痛みを堪えていた。突き刺した管をそのまま、さぐりを入れて、中の膿をさそい出すのであるが刺し込み場所がよくないとかで、ふたたび管を刺し替えた。

佐藤国手が帰つてから、ずいぶん乱暴なことをするんだな、と慰め顔に私の見た通りの話をするとき、最初のはひどく痛かつたが、二度目のはそうでもなかつた、しかしこれで安臥出来れば結構さ、と暗に明日からの幸福を夢見

ていたようだつた。

が、子規も漱石への手紙に書いているように（＝明治三十年六月十六日書簡に「先月末四五日間うち続きて九度以上の熱に苦しめられ朝も晩も夜もいつこう下がるといふこともなくまづ小生覚えてより、これ程の苦しみなし。今度は大方、あの世へ行くことと心待に待ち居り候」という一節がある）医者の保証を裏切つて、背中の楽な心持ちは、一週間とつづかなかつた。それに、管を突込んだ穴の一つの方は、いつまでも癒着しないで、たえず膿汁を拭きとらねばならない、別な事変を生じた。私が北国行脚から帰つた後、思い出したようには、「やはり痛いというのには、何処か無理があるのじゃな、痛くなかったのが綺麗に塞がつて、痛かつた方が、どうしても癒らない：佐藤ほどの国手でも、一寸した手具合があるもんと見えるな」と、長いこと穴の開閉に就いて考えていたかのような述懐をした。

それから一、二年も経つたずっと後のことであるが、背中の穴はもう塞がつたかな、と不用意な問い合わせをして、背中の穴どころか、この頃はお前、臀の方が蜂の巣のような穴だらけさ、といつになく荒々しい語氣で言つた。

脊髓カリエスは段々下方に移動して、尾骨あたりに及び、自然に膿汁のハケ口を臀部に求めて、手術もしない膿穴が、皮肉を浸蝕しているものらしかつた。もうそうなつては、膏薬だと、消毒だと、内用も外用も、手あての方法はない、腰一面綿をあてがつて、ソーッと包帯でもして置くだけのことさ、また何じゃな、ところどころ柘榴^{さくろ}のような口が裂けていて、そこから二六時中膿がじびじび出てくる、臀なんか大概ただれて腐つてゐるさ、子規は尚語りつづけるのである。

さうじやな、お前に立会つてもらつて、佐藤国手が背中へ穴をあけたのは、もう一昨々年のことになるかな、あの時、随分痛くてひどいことをする、と思つたが、それどころか、佐藤国手以上に、自然手術の穴が三つも四つ

も、捨てて置いたら今に蜂の巣のようになるだらうさ、背中の穴の一つが、どうしても塞がらないので、こんなことでは、もう生命は一分刻みに縮まるものと、あの年いっぱい位の覚悟はしたものだが、臀の方へこんな穴が出来たので、もういよいよいかん、加速度に生命は縮む、ととつに今日か明日かと待っているのだが、何の業か、まだ一寸死ねそうにもない、こうなると妙なもので、よし容易には死はない、出来るだけ頑張って生きてやる、そんな気にもなつてな、ただ困るのは、寝返り一つ出来ない、この生きながらの苦しみよ、もちつと緩めて貰うことは出来ないものかな、何とか身体を宙に釣つて、どう寝返ろうと、痛みも何も感じないと言つた具合にさ、毎朝の包帯とりかえ、それが一大事件で泣く叫ぶ、真に阿鼻叫喚（＝阿鼻地獄の苦に堪えられないで泣き叫ぶさま、転じて甚だしい慘状、苦痛）の修羅場なんだ、歩けなくとも、立てなくとも、坐れなくとも、と段々望みが縮小されて、今はどう寝返りがしたいというように、人間も虐待されればさる程、亀の子のように、おいおいちぢこまつて行く、弱いと言えば弱いし、強いと言ば強いもんぢやな、イヤお前らのような健康な達者な人には、どう話をしても、このアシの心持ちはわからんよ、どう苦しくて、やるせがなくて、滅入りそうで、それでいて息のある間は何でも出来るだけしておきたい…。

子規は独語のように言いつづけていたが、パッタリ黙ってしまった。かすかに啜り泣くかと思われるような声を忍んでいた。

「明治三十年の手術、そしてその後の容態は子規のこれ迄経験したことのない苦しみであった。後述するように、二十二才で結核という不治の病い、宿痾から死を思つたとは言え、「あと十年の命」という楽観があり、この時の苦しみからみると、それはまだまだ甘いもの、觀念的なものであつた。脊椎カリエス以後の子規は、死をなやましい觀念の問題としてでなく、即物的、即目的な、今の己れの肉体の激痛の中で、そこに迫つている生々しい現実と

して生きねばならなかつた。そして、この痛みから逃れるには死しかない。死は苦しみから解放される唯一の道であり望ましいものである。しかし、一方では現世における「野心」がある。生きているこの生を大切にし「息のある間は、何でも出来るだけしておきたい」——死はそこまで来ているからこそ、これをかけがえのないものとして存分に生きたい。その両方とも真実であり、その矛盾が子規のエネルギーの源泉であつた。折しも、この明治三十年という年は、柳原極堂の手によつて松山で「ほとゝきす」が誕生した。文学を「事業」としても考えていた子規が、これをどれ程喜んだか想像に難くない。創業の業は今なされつゝあるのである。だがその「ほとゝきす」を生んだ人は今死ぬような苦しみに喘いでいる。死ねば楽にならうが、簡単に死ぬわけにはいかない。この年四月「俳人蕪村」を「日本」に連載し、五月には「古白遺稿」を編集し刊行する。古白は本名藤野潔、母方の従従弟で子規より四才若かつた。子規は上京した明治十六年の秋から十七年にかけて、古白の父、藤野漸の家に寄寓し親しくしていたが、文学的素養に優れ「年少の古白に凌駕せられたる」とその才能を高く評価していた。子規が従軍する時、東京での荷作り等を手伝つた古白は、子規が広島を発ち、清国に向かう、その前日ピストル自殺をはかり四月七日に亡くなつたのである。（子規はその赴報を大連で受け取つた）「古白遺稿」は藤野家や漱石などの出資によって刊行されたものであつたが、文業中ばにして挫折した友人の遺稿をまとめる子規の胸に去來したものは何であつたろうか。「仰臥漫録」の中で「古白曰來」（古白曰く來たれ）と記しながらも自殺しなかつた、あの一節が思いあわせられる。

「子規の回想」には「家庭より観たる子規」の一章があり、碧梧桐が律に聞いたことも記録されている。

②（碧）包帯のとりかえは大事件でしたが、実際おとりかえになる看護婦としてのあなたの心づかいは？

（律）穴は背中と腰の方に、背中のは初め二つであつたのが一つになつて、都合まあ大きいのが二ヵ所、どれも

フチがただれて真っ赤になつて、見るから痛そう、というより無惨な程にギザギザになつていました。そこへ一寸でも触れようものなら、飛び上る——出来ない——ほどであつたらしいので、出来るだけソーッと古いのを剥がすのですが、いつでも膿汁でずくずくなつていきました。それから綿フランネルのような柔らかい切れに、一面油薬をぬつて、それを先ず穴の上に置き、其上へ脱脂綿を一重、その上へ普通の綿をかなり厚めに載せて包帯をかけ、ピンでとめておくのでした。さほど思つた程臭いはしませんでしたが、それをするのは朝の御飯のすんだあと、モヒ剤を飲んだ、薬のきいた時分を見計らうのでした。毎朝のことですから、お互にお勤めのような思いでした。

「モヒ剤」というのはモルヒネのことである。「仰臥漫録」の一部に「麻痺剤服用日記」がある。明治三十五年六月二十日から七月二十九日までモルヒネを服用した時刻だけを記したもので、飲まない日もあるが、多くは一度ないし二度と連日服用している。モルヒネはアヘンの主成分で痛覚を抑制するが習慣性が著しく、急性中毒の場合、ふるえ、めまい、吐き気などを伴いしばしば呼吸中枢の麻痺のため急死する。又、長時日、慣用すると苦悶・不眠・幻覚・妄想などの精神的症状の他に流涎・動悸・疼痛・嘔吐など種々の自立神経症状を呈すると言われる。子規が「モヒ剤」を常習的に服用したのはその痛みに耐えられなかつたからであり「仰臥漫録」を読むと禁断現象とも思われる記述も散見する。カリエスの膿は腰部だけでなく、肛門の傍や横腹にまでたまつて新しい穴をあけ、病人は寝返り一つ自由にできず、天井から紐を下げ、それにすがつてやつと寝返りをうつという状態である。食事をとるのも上半身だけねじるようにして片肘をついて箸をとつた。執筆も自由にならず、最後の隨筆「病床六尺」は妹、律に口述筆記させたものである。大小便も知らぬ間に出来るので、おむつを沢山あてておいて、妹がそれを取り替えた。しばしば聞こえてくる呻き声のため近所の子供達は氣味悪がつて子規の家に近づくのさえ嫌がつたという。子

規晩年の悲惨な病状である。」

晩年の子規の生活をテーマとして描いた小説に高浜虚子の「柿二つ」がある。虚子は、碧梧桐と同じ、子規の故郷松山出身の俳人である。二人は共に子規を俳句の師と仰ぎ、その後継者をもつて任じた友人でありライバルでもあった。二人は旧制の三高から二高へと転学、そして共に退学して子規の近辺に生活し、病者子規の看護をし、文学を学ぶという同じ道を歩んできた。神戸で子規の看病にあたつたのもこの二人である。「柿二つ」という題は「三千の俳句を闇し柿二つ」という子規の句からとつて題としたもので、三千句にものぼる日本新聞の投稿俳句の選を終えて安堵し、好物の柿を食べるという子規の生活を示した句である。この小説には病苦と戦いながら、文学に情熱を傾ける子規の姿が克明に描かれており、「回想の子規」に比べると、つき離したような筆致で子規の人間像、その生き方が解剖されている。小説という形をとっているとは言え、その大半は虚子の見た子規の姿、子規と虚子をはじめ弟子達との交流の事実にもとづくものである。その中から、弟子達との交流を示す場面を次に引用しておこう。

③柿を食つて柿十句を作りながら夕食には闇汁会を催そうという議が持上つた。横になつてゐる彼一人をのこして置いて他のものは皆表に買物に出掛けた。

めいめいの心はわけもなく悦びに充ちていた。店頭に立つてようやく思うものが見つかってそれを買い得た時にニタニタ一人笑いするものもあつた。

Kの細君は子供を背負つて松茸飯を焚いた。闇汁の鍋の中にはさまざまものが思い思いの形をして煮えつつあつた。

Kも嬉しそうな顔をして細君と共に台所に顔を出しては笑つた。

いよいよ鍋が席の中央に持出されてから皆の顔は一層輝いた。鍋の中から南瓜が出て来たり大福餅が出て来たりするとドッと笑った。

闇汁という事が皆に珍らしかったわけでもなかつた。この日は誰の心にも何んの陰も無かつた。ただわけもなく楽しいのであつた。

それから三四日経つて、同じような人数が又道灌山に集つた。それはその中の一人が医者になつて國に帰るのでそれを送別の為めの集会であつた。彼は又車に乗せられてその席に列した。

山茶花の大きな木の下に彼の乗つて来た車は置かれて彼の帰りを待つていた。その木には花が一杯に附いていた。

此日の御馳走はめいめいの持寄であつた。中にもKの持つて来た柚味噌が一番興を牽いて、それが火鉢の火の上に置かれてズツズツ煮えるのを皆面白がつた。

何も彼も面白かつた。詰らぬ事迄が面白かつた。

その前の日の会合を闇汁会と名づけ、後の日の会合を柚味噌会と名づけて彼はその記事を書いた。闇汁会には彼の趣向になる挿画があり、柚味噌会には俳人で書家であるところの当日の会合者の一人Iの写生画があつた。

この二篇の文章の出た雑誌（＝ほとゝきす）は殊に興味の多い号だとして一般に持て囃された。仲間中では自分等の機関雑誌の振つた事は即ち自分等の振つたこととして各々興奮していた。この勢いで行けば文壇に恐るべきものはないような自信がめいめいの頭に湧いて来ていた。又新聞紙上などでは、世間を余所にして悠遊しているこの仲間を羨ましい仲間だと言つたりした。

彼の病床で月に一回位、文章会が開かれるようになつたのもこの頃からであつた。

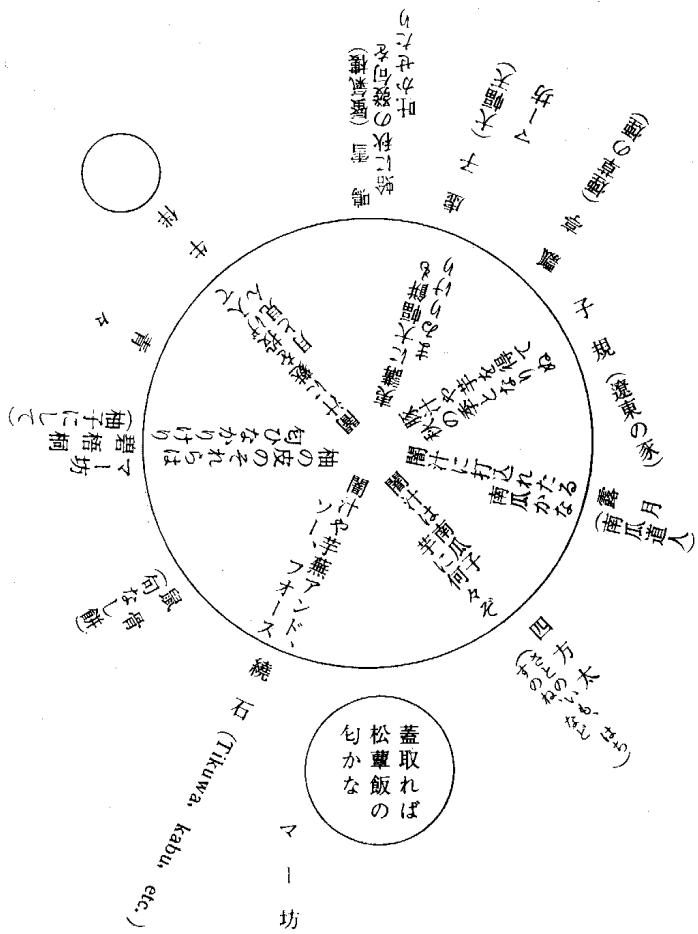
皆が文章を作つて彼の病床で朗読すると彼は一々それを批評した。彼以外の者もめいめい意見を陣べたが彼が何か言うと自然その言う事が尤もに聞えて誰もそれを疑う気になれなかつた。多少疑いを抱いている者も強いて争う勇気がなかつた。

この文章会が成立つてから、自然その席上で好評であつた文章がないとH雑誌には載らぬようになつた。〔闇汁会や柚味噌会、そして文章会について書かれたこの一節には病者子規を師とする共同体としての文学活動の様子がありありと描かれている。この中に書かれているように、子規は「闇汁図解」「柚味噌会」という二つの文章を明治三十二年十一月の「ほとゝきす」に発表している。まず前者からみると、その題が示すように図を入れて、参加者の位置を示し、各人の持ち寄つたもの、ならびに当人の代表句を一句ずつ記している。「柿二つ」の中に出でてくる

「K」は虚子、「子供」はマー坊である。

「下戸も食ひ上戸も食ひ、すこやかなる者も食ひ、病める者も食ひ、飯食ふた者も食ひ、飯食わぬ者も食ふ。食ひ食ひて鍋の底現はる時、第二の鍋は来たりぬ。衆皆腹をなでていまだ手を出さざるに露月黙々としてすでに四椀目を盛りつつあり」と子規はその中で書いているが、この闇汁句会の様

闇 汁 の 図



子がしのばれる。念のために言つておけば、闇汁は冬の季語で電灯を消した暗闇の中で隔てのない親しい人々が、各々持ち寄った汁の実を鍋に投じ、闇の中でこれを食べるという趣向の遊びである。後者の柚味噌会は「柿二つ」で言う通り医者になつて国元へ帰る人—秋田に帰る石井祐治（露月）の送別の句会である。参加者は露月の他に虚子、碧梧桐、牛伴、把栗、五城、繞石、四方太、青々それに子規の計十人で子規は「虚子もたらすところの柚味噌、この日第一の雅味とす、その他巻酢あり、切酢あり、麵包あり、黃粉飯あり、缶詰あり、佃煮あり、カラスミあり、サンドイッチあり」と食物を列举し「牛伴は牛の如く、把栗は栗の如く、五城は城の如く…」と各人の様子を描いている。そして自らについては「子規は横臥、餓鬼の如し」と記している。

俳句は座の文芸と言われ宗匠を中心とする共同体の文芸である。子規はその伝統を継承したとも言えるだがそこに集まつたのは日本の近代化が生み出した新しい階級「書生」あがりの二十代、三十代の青年達であり彼らの句会は個人主義、老人趣味的な消極的なものでなく「ほとゝきす」に拠つて近代日本の文芸界をリードしていくとする意欲と氣概に満ちたものであつた。そのイデオローグの頂点に立つてゐるのが、病者子規であつた。「ほとゝきす」は東京に移されてわずか一年余りで募集句に投稿する人が激増、発行部数も二千部、全国にその影響が及んでいった。子規の「事業の成功」は、想像した以上であつた。「芭蕉がるい弱な体であつたとは言いながら別に病人といふわけでもなく、ほとんど日本中国を行脚して廻つて数十年の歳月を閲してやつたことを、彼は根岸の一蝸牛盧（＝かたつむりの殻のように狭い家）に横臥したままで近々数年間に成就しようとはちょっと自分ながら想像のつかないことであつた」と「柿二つ」に言う。」

以上のような子規の脊椎カリエスによる病床生活を見てみると、絶望的とも言える状況の中にあって驚くほど個性的でエネルギーッシュである。病苦と戦いながらこれほど精力的に活動できたその秘密はどこにあるのだろうか。

それは①母や妹の献身的な看護（特に妹の力は大きく、妹は看護婦であり、口述を筆記する秘書であり、子規の家の家計をまかなう主婦・女中役でもあった）

②日本新聞社の陸羯南の援助（子規を最後まで日本新聞社員として遇し、その活動の場を与えたのみならず、子規の病状悪化の時は隣からかけつけて子規を慰めた。羯南自身も結核のため明治四十年五十才で亡くなっている）

③叔父の大原恒徳の経済的援助

④門弟たちの援助——これらの多くの人々の支えがあったればこそである。

と同時に子規自身の文学精神もかかわっている。病者とは言え人に援助されてのみ生きるのではない。生きるのは自らの意志である。子規の場合それは「文学的敢闘精神」とも呼ぶべきものであった。以下の文章において、これを具体的に検証してみたい。

三 子規の誕生

「子規の誕生」と題したが、これは正岡常規という一人の人間の誕生という意味でなく、文学者としての「子規」の誕生という意味である。文学者としての子規は明治二十二年「子規子」という散文において誕生した、と私は考える。それ以前は第一期、習作期であり、これ以後が第二期、自己確立期である。第二期への転換を促したのは結核の発病であるが、その病いを自分の文学者としての雅号とし、病いを生きる文学者として自己を規定したことに始まる。幼児から漢文に親しみ、少年期において江戸の戯作にも親しんでいた正岡常規は次の「様々な雅号」で述べるように、早くから、様々な雅号を持ち、文人を気どっていた人である。それは常規一流の遊び心、才知のひらめきではあっても、ただそれだけのことであって人生への真剣な姿勢を述べたものではない。試行錯誤的な様々な雅号の考案は、そのままアイデンティティの欠如を物語つてもいるようである。しかし明治二十二年の喀血、それにもちなんで「子規」と号した時、最初はやはりこれも戯れの雅号であったろうが、次第に自己規定として得心のいくものとなつた。以後常規は「子規」という号に深い愛着を覚え、生涯これを使い続け、文学者「子規」としての成熟と完成に自己を賭けていくことになるのである。以下、文学者「子規」の誕生を、その雅号を中心として考察してみたい。

(1) 様々な雅号

子規の「筆まかせ」という初期の隨筆（明治二十三年）の中に「雅号」と題する文章がある。それによると瀧沢解（馬琴・曲亭）太田覃（南畠・蜀山人・四方赤良）平賀源内（風来山人）など様々な雅号を用いた江戸の文人をあげ、次に自分がどのような雅号を用いてきたか、そしてなぜ、「子規」という雅号に定着するに至ったかが述べ

られている。

「我郷里の旧家には一株の桜樹ありて庭中をおおふゆえ、余は十余歳の時『老桜』と名づけたり、後、山内伝藏翁余に『中水』といふ名を給ふ。中水は中ノ川の意にて余が家、中の川に瀕するによりてなり。此名は自分の気に入らざりしゆえ使用せしこと少し。明治十四五年の頃大原大叔父（＝母の父、大原觀山。松山藩の儒学者であつた）、余の書斎の額にて五友先生の揮毫（＝書画を書くこと）を請ひしに、先生『香雲』の二字を書き給へりしかば、それより『老桜』『中水』の二号をすてゝ『香雲』といふ号となせり。故に今日にても、時として余を呼ぶに『香雲』の名を以てする者あり。『香雲』はけだし桜花の形容なり。この頃余は雅号をつける事を好みて自ら沢山選みし中に『走兎』『風簾』『漱石』などのあるだけ記憶しるれど其他は忘れたり。走兎とは余卯の歳の生れゆえ、それにちなみてつけ、漱石とは高慢なるよりつけたるものか。又、字（＝本来中国では男子が成年後、実名の他につける名前。子規は十二才のころより漢詩を作つており、漢詩人達をまねて字をつけようとした）をつけるとてはじめは『士清』とせしが、後に多くの雅号を生ずるに至りて此字は全くすてたり。然るに詩友などは矢張支那風に文章にては人の字を呼ぶゆえ『士清』と書く者あり。自らいやに思ひしゆえ、いつそ字を『子升』とせんかと考へるたり。『升』は余の俗称なり。（＝『升』は子規の幼名であり、母と妹は生涯ノボさんと呼んだ）然るに去年春、喀血せしより『子規』と号するゆえ、自然と字にも通ひて（＝字は本名からその文字をとることが多かつた）其後は友人も子規と書するに至れり。今日余の用ゆる号は左の如し（上段は普通用ゆるもの、下段は稀に用ゆるものなり）（注。以下ルビは筆者の施したもの）

じょうきボンブ
常規凡夫

しんたく
眞棹家

じょうき
丈鬼

じょうき
姫規

子規（音にても読み又訓にても使ふ）冷笑居士

だつさいぎよ

鮓祭魚夫

ほうろうし

痴夢情史

しゅうふうらくじつしゃしうじん

蕉尾道人

のぼる
野暮流

とうか
盜花

とうか
盜花

もつこうかんじや
沐猴冠者

しこくせんにん
四国仙人

ひきんせい
披襟生

かんじせい
莞爾生

ふわせい
浮世夢之助

うやむやまんし
有耶無耶漫士

うかれだるま
迂歌連達摩

じょうきポンブ
情鬼凡夫

ばこつせい
馬骨生

のばる
野球

しきしんじょうふ
色身情仏

つねのり
都子規

うとうつこじ
虚無僧

これですべてではない、この他に鑿鑿居士（＝食物をむさぼる人）僚凡狂士（＝平凡な風流を愛する人）青考亭

じょうき
丈其、棚舎夕顔・薄紫・蒲柳病夫（＝病弱な人）、病鶴瘦士（＝鶴のようやせた人）塵鶴病夫・無縁痴仏・

じょうまちぶつ
情魔痴仏・舍蚊無一仏・痴肉団子・仙台秋之亟・無何有州主人・八釜四九・面読斎・猿樂坊主（＝猿樂町に一時住

んだことから）などといふ号も考案したといい、その数実に五十三を数える。子規は一体なぜこんなにも雅号を考えたのであらうか——その理由として、江戸の戯作者達の作品や生き方に触れ、その影響——模倣があつたというこ

と、言葉（文字とか読み）に対する雑学的とも言えるような好奇心をもち、言葉遊びを楽しむ人であったこと、さらにはこのようないい處をもつての文人的な交遊関係を豊かにもつっていた人だということが考えられる。この最後の点について具体的に補足しておきたい。すでに一部紹介したように子規は数多くの友人がいて、しかも書簡を交わしていた。その書簡は単に実用的なものではなく文人としての交友を示すものである。

文学者としての「子規」確立以前の友人の中でも最も重要な人物は大谷是空^{ぜくう}、ついで夏目漱石であろう。大谷是空は第一高等中学校の同級生であり、二十一才から二十三才にかけて盛んに書簡をかわしあい、その往復書簡を「お百度参り」と称して「筆まかせ」に収めている。那是空に宛てた書簡の中で、浮世夢之助・盜花・都子規・莞爾・野球・能球・獺祭魚子・花風病主人・花風病夫・浮世女之助・蕪翠などここに出ているような様々な雅号が用いられている。又漱石に宛てた書簡では蕉尾道人（「しゃびどうじん」と読み、さとうきびのしっぽのようにならって甘い人物という意味であろうか）花風病夫・四国山人・野暮流などの雅号を用いこれも「筆まかせ」の中に収められている。この他の友人との書簡のやりとりもそのまま隨筆集の中に収められている。このことから子規にとって書簡が文学的な嗜みとしての意味をもつものであつたことが知られると同時に、雅号を生み出した母胎が書簡にあつたことも知られるのである。様々な雅号は友人間での文芸の遊びであり、習作上のペソネームとも言える。そして、その様々な雅号が「子規」に統一された時、「日本」新聞を媒体とする国民的な日本の文學者となつた、とみることができるのである。

雅号とはこうして書簡を書くことを通して発明された戯作者的な遊びではあつたが、断片的であるにせよそれなりにこの時点での子規の好みや性向又はその生活などを反映している。従つて子規理解の一つの手がかりとして、その雅号から迫ることも可能である。

ここにあげられた雅号の中で最も興味深いのは「漱石」であろう。子規は、この「雅号」と題する文章のあとに「漱石」について「今友人の仮名と変セリ」と注をつけている。当然のことながら夏目金之助の「漱石」という号について子規の影響を考えたくなる。そこでこの二人の関係について少し触れておこう。

子規は寮生活・学生生活を通じて多くの友人に恵まれていたが、面白いことにその友人を「愛友」「好友」「益友」「嚴友」「文友」「酒友」など十九種に分類し、その下に具体的に友人の名を記している。漱石については「畏友 夏目金氏」とあり、子規はこの当時すでに漱石に一目置いていたことがわかる。(「筆まかせ」明治二十二年)だが子規にとって友人は漱石一人に限られたわけではない。子規はその生涯にわたって異性としての女性との交流は全くといってないものの、それに代るかのように、友人や弟子を沢山持ち、その交際を重んじた人である。明治二十二年から二十五年頃にかけての書簡をみてみると、漱石の書簡は、そのほとんどが子規あてであるのに対して、子規は漱石の他、様々な人に宛てて書いている。一人のつきあいは「寄席好き」という共通の趣味をもつて始まった。「寄席好き」ということは二人とも言葉遊びが好きだということでもあり、子規の雅号には文人意識とうより、落語的感覺にもとづいたものも多い。当然のことながら、雅号のことも話題にのぼったと思われる。

夏目金之助が「漱石」という号を初めて使ったのは子規の「七草集」(漢文、漢詩、和歌、俳句、謡曲、小説など雑多な小品を集めた作品集)に対する批評文の中においてである。号は自らつけることもあるが、人につけてもらう場合もある。子規自身「香雲」という雅号をもらつたことがあるし、高浜虚子・佐藤紅緑・永井破笛など門弟に与えた雅号も多い。金之助が子規の作品を評した文章の中で初めて「漱石」という号を用いたのは、子規が最初考えた号を用いることに対してその了解を得ようとする気持ちも内に含まれていたのではなかろうか。

しかし、漱石自身の言によれば、「小生の号は、小時蒙求を読んだ時に故事を覚えて早速つけたもので、今から

考えると陳腐で俗氣のあるものです」（「中学世界」明治四十一年十一月）ということであり偶然の一致ということになる。私はこの漱石の記述に幾分の疑問をもつていて、「蒙求」を読んだ時、気に入つて「早速つけた」というのだが、子規と出会う以前の文章のどこにも「漱石」という号は使わず「夏目金之助」で通している。もちろん作品としてではなく学校の課題として提出したものであるから本名を使うのは当然だが「早速つけた」というのは「使つた」という意味であろうから、その片鱗はどこかに表われていいようと思う。子規がすでに十代のころから自らの号を様々考え、使い、文人、戯作者気取りであつたのに比べ、号に対する漱石の態度はきわめて内気な、シヤイなものであつて「我輩は猫である」という明治三十八年の処女作によつて全国にその名が知られてからも、いまだに「漱石」という雅号について「陳腐で俗氣のあるものです」と抵抗感をもつてゐるのである。明治二十二年の子規宛て書簡で漱石は「七草集」についての書評について「妄評」であつた、「赤面の体に御座候」と恥じ入つており、その末尾に

「『七草集』にはさすがの某それがしも実名を曝すは恐レビデゲスと少しく通つうがりて当座の間に合わせに『漱石』となむしたり顔に認め侍り、後にて考ふれば『漱石』とは書かで『漱石』と書きしやうに覚え候。この段御含みの上御正し下されたく先はそのため口上左様。米山大愚先生（＝米山保三郎、大学予備門時代からの友人）、傍より自己の名さへ書けぬに人の文を評するとは『テモ恐シイ頓馬ダナー』チヨン々々々」

と友人にからかわれたことを紹介して笑いながら詫びてゐる。「当座の間に合わせに」とか「漱」の字を間違えるなどというのは、初めてその号を使つた時に出てくる言葉ではなかろうか。自分を変人、偏屈者だという自意識を持つていた金之助が「蒙求」を読んだ時、この話に大いに親しみを感じたことは確かであろう。しかし夏目金之助は雅号を持とうなどとは考えたことはなかつたのではなかろうか。子規の文業がきわめて早熟であつたのに対しても

漱石の文才は晩熟である。学生時代も建築家を考えたことがあるし、英文学を志しても、それは研究者であつて雅号など必要とするわけがない。周知のように金之助が本格的な作家活動に入るのは四十才になつてからで、子規と出会う以前の金之助に雅号をもとうという発想はなかつたのではなかろうか。二人の青春の交遊関係において子規との文人意識や戯作的な姿勢は金之助に大きな影響を与えた——それが「漱石」という雅号を生み出した、と私は考えている。子規が様々な雅号を考えていたことや、雅号をめぐつての話題も二人の間にかわされたであろう。子規が「漱石」と号したというようなことも話に出た可能性が高い。それは金之助のかつて考えたこともあつた。それは偶然の一一致であつた。だから興味をもち、子規の作品を評する時、二人の絆としても、その雅号を使った、それが「漱石」誕生の背景にあると思う。二人は大学予備門における同級生として出会つたが、二人を結びつけたのは落語や寄席に対する興味・関心であつた。それがしだいに人生や文学の問題について語りあう深い友情へと発展していくのだが、二人の性格の中には共通する点もあつたのではなかろうか。それが「漱石」という号に示されていると思う。

漱石とは、もともと「石に枕し、流れに漱ぐ」（枕石漱流）というべきところをまちがえて「枕流漱石」と言つてしまつた、それを素直にわびないで、「流れに枕するのは耳を洗うためだ、石に漱ぐのは歯をみがくためだ」と強弁したというところから生まれた言葉であり、この話から「負けず嫌いなこと、負け惜しみすること」を言うようになつた。漱石は確かに負けず嫌いの人であつた。その負けず嫌いは相手を素直に受容するのでなく、自分の頭で徹底的に考えぬく、という形で表われているように思う。西洋の追従に事足れりとしない「自己本位」（「私の個人主義」）の哲学はその端的な例証である。一方子規も確かに負けず嫌い、負け惜しみの人であつた。子規の病苦の生涯と文学の、その根底に流れているのは「漱石」的な気質だと私は思う。「漱石」とは高慢なるよりつけたる

ものか」と「雅号」の中で子規は書いているが「高慢」とは他人をあなどり軽蔑するということではなく、自らを高く持する我慢というべきである。人に対しても簡単に負けたと言わず、人生の苦しみに直面してすぐに弱音を吐いてしまわない強情、これは子規の性格の特徴であって、それが子規の文学、生き方の大きな特色になっている。子規が晩年、中江兆民を批判して述べた言葉の中に「病氣の境涯に処しては病氣を楽しむといふことにならなければ生きいていても何の面白味もない」（「病床六尺」七十五）という一節がある。健康な人が病氣の人をみて休んでいられてしまうやましい、などと軽く言うことがある。又時に、軽い病氣なら、そのおかげで休めたり、わがままができるいいと思う時もないではない。しかし、死にたいと思うほどの苦しみを味わいながら、こんなことを言えるところに子規らしさがある。それは「漱石」的な負け惜しみ、強情、我慢ではなかろうか。子規が自らを「漱石」と号したのはこのような自分の性格をよく把握していたからだと思う。又、「負け惜しみ」ということは、子規の文章の中に時々出てくる言葉である。「漱石」という号を捨てたにせよ、自分の性格の中に子規はそれを認めていた表われだと考えられる。

「丈鬼」は戸籍名の「常規」を音読みした「ジョウキ」に、江戸の俳人上島鬼貫から「鬼」をもらい（「啼血始末」より）、「常」に「丈」をあて「丈鬼」とした雅号である。又「ジョウキ」の発音をとつて「ポンプ」をつけたのが「常規凡夫」（蒸氣ポンプと掛けた）である。「姫姫」はおそらく辭書を調べて「常」や「規」という字が旁りや冠のように入っている漢字を見つけて興味をもつたものであろう。共に「女」の字が入っているのが面白い。漱石との書簡のやりとりの中で、漱石は子規を「妾」とか「子規御前」などとふざけて呼んでいることも思いあわせられる。漱石は子規の戯作的な姿勢に影響を受け、自らを「平らの凸凹」（あばたがあつたことから）「郎君」（妾に対する言葉）「漱石」などと書いている。「漱石」と言えばあまりに夏目漱石その人のイメージが強す

ぎるため、今だれもここにユーモアを感じないだろうが、元々ユーモアを意識してつけたものであろう。漱石の書簡をみると、このようにふざけて自分の名前を書いているのは子規との間だけであって、それ以外すべて「夏目金之助」で通している。一方「子規」は「正岡常規」の他に「子規」とか「規」などもよく使っている。

幼名の「升」を万葉仮名風に別な漢字で表記したのが「野暮流」と「野球」である。「野暮流」には野暮という意味もこめられている。子規は東京に出て、自分が野暮な田舎者だという劣等感あるいはその裏返しの誇りを持ち続けた地方人で、ここには「四国仙人」に通じる地方人意識が伺われる。

「野球」の「野」は「ノ」、「球」は英語で言えば「ボール」で、「やきゅう」ではなく「のぼる」と読む。同時に、ここには子規が二十一才のころ最も熱中した野球を裏に含めてもらいる。子規は大学予備門時代野球に熱中し、友人の間では名キャッチャーとして知られていたという。「ベースボールにのみ耽りてバット一本球一個を生命の如くに思ひ居りし時なり」（「新年二十九度」明治二十九年）とこのころを回想した文章もあり「松蘿玉液」という「日本」新聞連載の随筆の中では、ベースボールのルールや特色を解説したり「久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れど飽かぬかも」「今やかの三つのベースに人満ちてそぞろに胸のうちさわぐかな」などという短歌（狂歌？）を作つたりもしている。子規が「野球」という言葉を使つているところから「ベースボール」を「野球」と訳したのは子規ではないかとする説があるが、これは書簡の末尾に自分の名として使つたものであること、似たような発想に立つ号に「能球」という号があることから考えて「ノボル（升）」という幼名を意識したものである。

「松蘿玉液」には「ベースボール未だかつて訳語あらず、今ここに掲げたる訳語は吾の創意に係る。訳語妥当ならざるは自ら之を知るといへども勿卒の際改ざんするに由なし（＝急いで書いたもので改めるすべもなかつた）。君子幸に正を賜へ（＝適當な訳語を示してほしい）」（七月二十七日）と断つている。これによれば子規の考えた訳語

は投者・走者・除外・廻了・第一基・満基などであってベースボールはそのまま片仮名表記だが一箇所だけ「球戯」という訛語を使っている。つまりこのころ「野球」という訛語はまだなかつたと考えられる。

「蕪翠」はその文字から考えると「翠（みどり）蕪（あ）れる」という意味らしいが、音読みしたブスイが「不粹」に通じることからつけたものだらうし、「四国仙人」（松山出身であることから）「沐猴冠者」（本名は、猿が冠をかぶつているという意味だが、山国育ちの自分が通^{アラマサ}を氣取つているということを自嘲をこめて表現したものであろう）「盜花」（花を盜むとは風流、通を氣取るという意味であろう）「馬骨生」（馬の骨のような役立たず一田舎者）なども同じ発想に立つものと考えられる。

「瀬祭魚夫」とは、本来瀬^{かわうそ}が自分のとつた魚を並べておくのを、物を供えて祭つておくるのを、物を供えて祭つて作られた言葉（瀬、魚を祭る）であるが、転じて詩文を作るため多くの本を並べて調べる人も言うようになつた。子規は自ら言うように、学校の勉強に対してもいいかげんだつたが、自分の好きな勉強、自分で考え、自分で調べていく勉強に対してもきわめて熱心な勉強家であった。その何よりの例は二十四才に始まつた俳句分類である。これは江戸時代までの俳句を季題別に分類するという作業で子規の生涯の仕事となつたものである。後に「瀬祭書屋主人」とも号するがその原型がこの「瀬祭魚夫」という号である。「真棹家」という号もこれに通ずるもので「棹」は机であるから眞に机の人——つまり書斎人、読書家という意味であろう。

「秋風落日舎主人」とか「迂歌連達摩」とか「色身情仏」（勿論「即身成仏」のもじりである）「虚無僧」「痴夢情史」「浮世夢之助」などという号にはいずれも浮世をはかなむ風の江戸の戯作者的な号である。

「披襟生」とは襟をだらしなく開いている人ということで書生としての自分を戯画化したものであらう。「有耶無耶漫士」も同様で、だらしのない何でもいいかげんにしておく遊び人というような意味であらう。「放浪子」は

松山から東京に出てきたこと、旅好きであったことからつけた号であろう。

「莞爾生」の「莞爾」とは「につこり笑う」という意味だから、「冷笑居士」の「冷笑」と大分隔たりがあるようみえるが、いずれもこの世を「浮世」としてつき離してみる意識の反映であろう。

以上のように様々な雅号をたわむれに考案しては自ら楽しみ、又、書簡の相手や友人を楽しませようという感覺は江戸戯作者の感覺であり、子規の幼少期から親しんできた江戸文学の影響によるものである。歴史や文学に「もし」という仮定は許されないのであろうが、もし子規が江戸時代に生きたなら地方の戯作者として生きた可能性は充分にある。だが、子規は明治に生きた。そして十六才にして東京に出たことは明治という近代国家の「開国」「文明開化」の使命を自分のものとして引き受けるということであった。「開国」「文明開化」の、その先端に立ち、進んだ西欧文明の情報を受信する基地が東京であった。「書生」として東京で勉学できるということは、現代では想像できないほどの夢あふれる、胸躍るような出来事であつたろう。ことに才能のある知識青年にとって、東京に出るということの意味は大きかった。「余は生まれてよりうれしきことにあひ思はずにこにことゑみて平氣であられぎりしこと三度あり、第一は在京の叔父（＝加藤拓川）のもとより余に東京に来れといふ手紙來りし時、第二は常磐会の給費生になりし時、第三は予備門へ入学せし時なり」（「筆まかせ」半生の悲喜 明治二十一年）と語るよう。東京遊學は子規の人生の中で最もうれしい出来事の一つであった。それは、地方戯作者として近世的文人としてその生を終えたかもしれぬ子規を近代の文学者とする第一の契機であった。

そして、さらに言うなら、東京に出て心ならずも結核を患つたこと、これが子規を近代の文学者とする第二の契機であったと思う。「然るに去歲春、喀血せしより『子規』と号する故、自然と字にも通ひて其後は友人も子規と書するに至れり」（「雅号考」）と言う通り、「子規」とは喀血したことになんでつけた号であったが、又、一つ

には本名の「常規」に重なるということから、「字」としてもふさわしいと考えた。「雅号」は「文人・学者・画家など本名以外につける風雅な別号」（「広辞苑」）であるが、「字」は社会的に一人前の人として交わる時の名であり、男子は元服してから、実名と意味の上で関連する文字を選んでつけるものである。そして両親、師など特別な目上の人は実名で呼ぶが、一般の人は字で読んだ。「子規」は「雅号」でもあるが「字」であるとも意識されたいたというのは一人前であることを宣言するという意識も根底にあるように思われる。そして次の項に述べる「子規子」は一種の「自立宣言」のように読むこともできるのである。死に至る病いである結核は「挫折」ではなく、不思議なことに「自立」の契機であった。「自立」の契機として結核があり、これが子規を近代の文学者とした。結核はおそらく近代の病いとして象徴的な意味を担っている——ガンやエイズが現代の病いとしての性質をもつているのと同様に。

夏目漱石は明治三十八年「ホトトギス」二月号に発表した「我輩は猫である」の第一回において、次のような会話を登場人物にさせている。

「それに近頃は肺病というものが出来てのう」「ほんとにこの頃のように肺病だのペストだのって新しい病気ばかり植えた日にや油断も隙もなりやしませんので御座いますよ」「旧幕時代にない者に碌な者はないから御前も氣をつけないといかんよ」「そうでございましょうかねえ」

漱石自身は「胃病」と「狂氣」に生きた文学者であり、これらの病気は日本の急激な近代化のもたらしたものとみていた。「胃病」は漱石にあって「神經性」の内面の病いとして考えられていた。「ペスト」や「肺病」のような外因性の病気についてはどうであつたのか。近代国家成立と病いとのかかわりについて、文明論的な視点から、少し立ち至つて述べてみたい。

まずペストについて言えば、当時ねずみがペストを媒介することからねずみ捕りが奨励されており、交番ではそれを買上げていた。それほど恐れられた病気であったわけだが、実はそれ以上にはるかに猛威をふるったのはコレラである。ペストもコレラも開国に伴つて外国から入ってきた急速伝染病である。近代日本におけるペストの流行については文献にあたることができなかつたのでコレラについて紹介しておきたい。

コレラが最初にその猛威をふるつたのは安政五年（一八五八年）アメリカの軍艦ミシシッピー号からの侵入によるとされ、長崎から全国に波及し三年間にも及んだ。次に明治十年（一八七七年）清国から伝播し、西南戦争帰還兵に媒介されて流行、続いて明治十二年、十五年、十八年、十九年、二十三年、二十四年、二十八年と間歇的に流行を繰り返している。特に明治十二年の流行は最大級のもので患者数十六万二千六百三十七人、死者十万五千七百八十六人にのぼつた。その死者は清国、日露戦争の死者の総計を越えるものである。コレラは致死率六〇～七〇%にのぼり、たちまち悶死するところからコロリ病と言われて恐れられた。これが資本主義化に伴つて都市に移動した人々、生活環境の悪い都市のスラムを直撃した。富国強兵、開国政策の裏にあるのがコレラの侵入であり、政府はこれに対して「虎列刺病予防法心得」を発布するが、これは衛生行政の最初のものであり近代医学史、疾病史の原点となつたと言われる。しかし、この法令については一般の民衆は果物・魚介類の販売禁止などに対する反発から各地でコレラ一揆が続発する。「いやだいやだよ 巡査はいやだ巡査コレラの先き走り チョイトチョイト」（「チョイト節」明治十五年）などという歌によつてもコレラ対策が官憲による弾圧という側面があつたことが知られる。明治三十年（一八九七年）には「伝染病予防法」が制定され、コレラ・ペスト・赤痢・腸チフス・痘瘡・発疹チフス・猩紅熱・ジフテリアの八種類が法定伝染病とされる。これらの急速伝染病はそれ以後も毎年数万の患者を出し、死者も一万人を下ることはなかつたものの、それ以後爆発的な流行が起ることはなくなり、現在に至つ

て いる。

ペストやコレラに代わったのが結核という慢性伝染病である。これは近代の担い手として地方から東京に出た、免疫をもたない、有為な青年を冒した。又、農村から身売り同然のようにして出て織物工場で働く若い娘達にたちまちのようにして広がった。結核は近代化＝都市化のもたらした病いであり、産業革命のもう一つの面を象徴するものである。「女工哀史」はその端的な表われである。このようにして歴史的な文脈の中で眺めてみると、その舞台での近代国家の成立、産業の発達、近代化の成功などといわれるものの影で、病いがまさに時代の病いとしての姿を見せて いるわけで、病いを「自然科学」や単なる個人のものとしてではなく、人間全体の宿命・歴史の宿命として見ていた漱石の把握は鋭かつた。（朝日百科「日本の歴史」^⑨「近世から近代へ」及び中央公論社「日本の歴史」^⑩「近代国家の出発」色川大吉を参考した）

（参考、コレラ及び結核に関する年表▽）

コレラの猛威

一八五八	安政	五	安政五カ国条約調印。コレラ大流行。長崎に来たアメリカ軍艦により侵入、ほぼ全国に及ぶ。
一八六七	慶応	三	横浜で強制的な娼妓検診。英國軍人の性病予防が目的。
一八六九	明治	二	政府、相良知安らの進言により、ドイツ医学の採用を決定する。
一八七〇	明治	三	種痘館規則公布。種痘を実施するよう各府県に布告。伝染病予防関係の規則の最初。
一八七三	明治	六	内務省設置（一八七五年より衛生行政を管轄）。
一八七四	明治	七	「医制」七十六条を東京・京都・大阪府に通達。近代的衛生行政制度の始まり。死亡診断書が埋葬の際の必要書類となる。
一八七六	明治	九	天然痘予防規則を制定。初の強制接種制度。
一八七七	明治	十	清国よりコレラが伝播し、西南戦争帰還兵に媒介されて流行（以後、七九、八一、八六、九五年に

大流行)。虎列刺病予防心得を年制定。この年から三年間、コレラ一揆多発。壳薬規則制定。博愛社創立(八七年、日本赤十字社に改組)。

一八八〇

明治十三

伝染病予防規則を制定。

一八八三

明治十六

医師免許規則および医術開業試験規則を制定。大日本私立衛生会を創立。

一八八六

明治十九

地方官官制を制定、地方衛生行政の仕事は実質的に警察に移行。

一八八九

明治二十二

フランス人宣教師、御殿場に神山復生病院を開設。この前後に宗教関係者によるハンセン病病院が十数か所できるが、半数は昭和十年前後に閉鎖。

一八九一

明治二十四

神田に東京看護婦会設立。看護婦会の最初。

一八九四

明治二十七

治外法権の撤廃を実現(一八九九年施行)。日清戦争開戦(戦死千四百人余、病死一万二千人弱)。

一八九七

明治三十

伝染病予防法を公布。コレラ、赤痢など八種類の病気を法定伝染病とする。足尾銅山の鉱毒被害民

一九〇〇

明治三十三

大挙上京し、請願。

一九〇四

明治三十七

精神病者監護法を公布。私宅監置を法的に認める。娼妓取締規則制定、公娼らに対する検診制度確立。

一九〇七

明治四十

法律第十一号(癩予防に関する法律)を公布。公立療養所が五か所設置される。浮浪のハンセン病者を収容対象としたが、原籍調査を徹底的に行つたため、家族・縁者にまで悲劇が及んだ。

一九一一

明治四十四

恩賜財団済生会、「極貧層」対象に慈恵医療を開始。社団法人実費診療所開設。無産者と「中産階級の下」を対象とした軽費の診療所。

一九一三

大正二

石原修「女工と結核」発表。

一九一六

大正五

工場法施行。十二歳未満の就業禁止、十五歳未満者と女子の十二時間以上の労働を禁止した。

「国民病」としての結核

一九一九

大正八

結核予防法を公布。結核患者の隔離原則を法律化したが、この頃、推定患者数五十万に対し、公立療養所は十七か所。

一九二五

大正十四

細井和喜蔵『女工哀史』刊。

一九二七

昭和二

健康保険法施行。当時の被保険者は、政管健保百十四万人、組合健保八十万人。

一九三〇

昭和五

国立の癲療養所・長島愛生園を開設。絶対隔離を唱える光田健輔が園長。

一九三一

昭和六

満州事変。癲予防法公布。絶対隔離主義を採用し、患者救護費弁償制を廃止、本籍氏名を申告せずに入所可能となる。

一九三二
昭和七

結核死亡率（人口十万対）が男一八二・一、女一七七・一となり、明治以来の男女比が逆転、健民健兵政策の障害とされる。

一九三七
昭和十二

日中戦争開戦。結核予防法改正。医師の届け出、道府県に療養所設置、感染患者の入所措置を定める。

一九三八
昭和十三

厚生省設置（翌年、予防局に結核課を新設）。国民健康保険法、母子保護法施行。国家総動員法公布。

一九四〇
昭和十五

国民体力法、国民優生法公布。

一九四一
昭和十六

太平洋戦争開戦。

一九四三
昭和十八

結核死亡率（人口十万対）、一二五・九でピークに達する。以後、漸減。

一九四五
昭和二十

原爆投下。敗戦。G H Q、「公衆衛生に関する覚書」を出す。戦後の衛生行政の出発。

一九四六
昭和二十一

日本国憲法公布。

一九四八
昭和二十三

ハンセン病患者による治療薬プロミン獲得闘争起こる。日本国立私立療養所患者同盟が発足。医師法・歯科医師法公布。医療法公布。

一九四九
昭和二十四

結核治療薬のストレプトマイシン国産確保要綱を閣議決定。

一九五〇
昭和二十五

精神衛生法公布。私宅監置制度の廃止。

一九五一
昭和二十六

結核予防法全面改正、医療費の公費負担等を規定。死因別死亡順位のなかで、昭和十年以降、第一位であった全結核が、この年、第二位。以後、急減。

（朝日百科「日本の歴史」⑨「近世から近代へ」による）

(2) 「子規子」——「啼血始末」について

「子規子」は明治二十二年八月から九月にかけて自分の病気が「子規病」——結核であるという自覺に立つて書かれた作品である。「筆まかせ」第一編の「是空子規自序」に「是空ノ友、子規子、子規子ヲ著ハス 記スル所 咩

血始末　血の綾 及ビ読書弁ノ三編トス」とあり、もともとは三編から成っていたようであるが現存するのは「啼血始末」「読書弁」の二編である。「子規子」という総題は老子に「老子」という著作があり、莊子に「莊子」という著作がある（老子、莊子は人名であると同時に作品名もある）のに倣つて子規に「子規子」がある、という意味でつけられたとその序に言う。古典中の古典に並べて自分の作品を位置づけるなどとはよほどの自信、うぬぼれとも見られる。ここにはいかにも明治の青年らしい氣負いや、「客氣」がある。とはいえ二十二才の青年が老子や莊子のような豊富な人生経験に裏づけられた作品を書くのはまず無理であろう。子規とても、それをねらったのではない。子規の書こうとしたのは、そのような真面目な、深い思想的作品ではなく、そのもてあまし氣味の才知、教養を生かして、愉快な作品を書いて自ら楽しむことであり、漢文のパロディとも言える作品を書くことであつた。それは漢戯作と呼ばれるものであつて近世文学の一潮流でもあつた。江戸時代には、たとえば「伊勢物語」に対する「仁勢物語」、「源氏物語」に対する「偽紫田舎源氏」「盧生一炊の夢」に対する「金々先生栄華の夢」といった具合に日本や中国の古典をパロディ化する文芸が流行した。そこでは優雅なものが低俗なるものに、まじめなものが滑稽なものに転化され、仏教的無常觀で捉えた「憂き世」意識が近世的な現実的・庶民的感覺に立つ「浮き世」意識へと転化せしめられている。これがいわゆる「戯作」と呼ばれるもので洒落本・滑稽本・黄表紙などといふ名で流行した。作者としては上田秋成、平賀源内、太田南畝、曲亭馬琴、十返舎一九などがおり、子規が少年期にこれら近世戯作者達の作品に親しんでいたことは、すでに「雅号」のところでも述べた。「子規子」もこのようないくつかの近世的な文芸意識に立つ作品であつて、明治期の文芸には、このような江戸戯作の名残が残つていたのである。明治になつて西欧の文学の強い影響を受けたとは言つても、伝統的なものを切り捨てたということではない。「東海道中膝栗毛」をもじつた仮名垣盧文の「西洋道中膝栗毛」などもその一例である。坪内逍遙の「小説神髄」

(明治十八年、十九)によるリアリズムの主張はこのような江戸戯作的な小説遊戯観を打破することにあったと言われる。その逍遙自身が江戸戯作に深く親しみ、その影響を強く受けてもいた。その点で、子規の推し進めた俳句・短歌における写実主義の主張と逍遙の推し進めた近代小説の企ては通底するものがあつたと言えよう。偶然のことながら子規は十七才の時、進文学舎で逍遙から英語を習っている。又十八才の時「当世書生氣質」を読んで感動している。二十五才の時には漱石と共に逍遙を訪ね、それが縁で「早稻田文学」に寄稿している。近代小説の祖と言われる坪内逍遙への子規のこのような親近感を考える時、子規の文学を伝統的詩歌の革新運動という視点からのみ評価するのではなく、近世文芸の名残りを考察した上で、しかも近代人としての意識を考察する必要があると思う。その点で「子規子」は重要な素材を提供している。結論的に言うなら「子規子」には漢戯作という前近代的な手法を通して、近代人としての子規の内面を描いたとみえるからである。

「子規子」の一編である「啼血始末」のテーマは「肺患」という罪、それに対する罰ということである。読書している子規のところに鬼がやってきて、子規は閻魔大王の法廷に連れていかれる。閻魔大王は普通「地獄に墮ちる人間の生前の善惡を審判、懲罰するという地獄の主神」(広辞苑)と考えられているが、子規はそれを「肺患」に冒された自分に当てはめ、生きている自分がその罪によつて法廷で裁かれ、あと「十年の命」を宣告されるという話である。

その中で自分が「子規」と号することになった由来も説明されている。これによれば明治二十二年二度目の喀血を見るが、その時、子規が卯年生まれであつたこと、喀血したのは卯月であるところから「卯の花をめがけてきたか時鳥」「卯の花の散るまで鳴くか子規」の二句を作り、それ以来「子規」と号したということが「被告子規」の言葉を通して語られる。この二句は明治二十二年五月十一日付の叔父宛の書簡(②)に収められているものであ

る。すでに述べたように「時鳥」「子規」は共に訓で「ほととぎす」と読み、喉をありしほにして鳴くところから「鳴いて血を吐くほととぎす」と形容され、血を吐く病い、即ち、結核の隠語であった。又和歌の世界では「死出の田長」とも呼ばれ、死と関係深い鳥と考えられていた。徳富蘆花の小説「不如帰」も、肺結核のために離縁され、孤独のうちに死んでいく美貌の女性川嶋浪子をヒロインとする悲劇を描いたものである。このような死に至る病いとして忌み嫌われ恐れられていた結核をもつて自らの号とするというのは、あまりに大胆、でなければふざけすぎのようにもみえるが、一方ではほととぎすは伝統的な詩歌の世界でしばしば素材となっていた鳥でもあり、花鳥風月という言葉で端的に表わされる風流韻事の世界の象徴でもあった。こうして病名を暗示すると共に、伝統的な詩歌の世界に生きる詩人としての雅号、その両者を統合する「子規」という号を持ったということはその後の子規の生涯と活動を考える場合、実に象徴的なことであった。子規という文学者の本質は「子規」というこの二字の中に端的に表現されているように思われるからである。しかし「子規子」が重要な意味を持つのは、單に自らの号の由来を説明しているということにあるのではない。

作品に即してもう少し具体的にみていく。読書している子規のところに、鬼がやつて来て閻魔大王の法廷に連れていかれる。子規が「病氣という罪」を犯したからである。なぜ、そのような「罪」を犯したのかということは、言いかえると、なぜ病気になつたのか、という問題である。人が犯罪を犯し法廷で裁かれる時、必ず、その罪を犯した原因が問題にされる。その原因によつては、同じ行為でも罰に輕重が出てくる。「肺患」にかかつた一罪を犯した「被告子規」は閻魔大王の法廷でその原因を検事である「牛頭赤鬼」「馬頭青鬼」に追求される。とは言つてもこの「被告」は神妙さが欠け、話はあつちこつちに脱線し、冗談半分の悪ふざけな態度は横柄であつてさつぱり「被告」らしさがない。それは病氣を通して深刻に、まじめになることを拒否し、病氣を笑いの対象としよう

とする子規の態度からくるものである。子規にとって文学とは、病氣という深刻な苦しい現実も笑いの対象としてそれと遊ぼうとすることであり、病苦のペロディとして「啼血始末」は書かれている。江戸戯作の世界で「憂き世」が「浮き世」として捉えられているように病いの「苦しみ」が「おかしみ」に転じていてある。ペロディが原作のもじりであるように、子規は自分の人生体験を病氣に結びつけて、もじりながら語っている——病氣という罪を犯した原因を。

原因の第一——根本的な原因としてまず挙げられているのは、子規が生まれつき病弱であって健康に恵まれなかつたことである。顔色がよくないため小さいころから友人に「青瓢箪あおひょうたん」というあだ名をつけられたこと、泣き虫であつたこと、朝起きると胃液を吐くことがたびたびであつたこと、運動をしないため消化が良くないこと、生来貧血症であつたことなどまで面白く語られている。

第二に「近因」——直接的な原因として挙げられているのはよく風邪をひいたことで、室内で綿入れ一枚で過ごすと外へ出る時もそのままで出るという不精者であったこと、フランネル（＝紡毛糸で荒く織つたやわらかい織物。ネル）を買う金が惜しく薄着しがちであつたことが「雨は降らんねる」とがまんして決め込んでいたなどと駄洒落まじりに述べられる。

第三に散歩や運動は嫌いなくせにやるとなれば「ベースボール」のような激しい運動をしたということが挙げられている。「肺炎」と野球を結びつけるのは大げさで強引なこじつけだが、そこは遊びである。自分のこれ迄やつてきたことを何でも病因として結びつけてしまつている。

第四に挙げられているのは勉強の副産物として過食になつたことである。もし世間が人が言うように勉強のためには「肺病」になつたとすれば、その人は真の「大丈夫」（一人前の立派な人間）であつて何ら悔やむべき、恥ずべ

きことなく、かえって誇りにできることである。しかし、自分の場合、そのような勉強の結果ではなく、むしろ勉強しながら絶えず食べたこと、その過食が原因だというのである。これも「肺病」の原因としてとりあげるにはあまりにナンセンスで馬鹿馬鹿しいことである。しかし勉強しながら机上に食べ物を置いてよく食べたというのには、子規の癖であつたし、食べることへの関心は読書に対する関心と共に子規の大きなテーマであつた。

最後に「肺病」の原因として、判決が下つたあと泣き言の、弁明のように挙げられているのが自分が貧乏であることである。子規は幼くして父を失い、母子家庭となり、経済的援助を受けながら東京での生活を続けていたことは前に紹介したようにその書簡が示すところである。「フランネル」を買えなかつたというのも、貧しさゆえであるし、医師の勧める「養生」が思うようにできなかつたのも貧しさゆえである。貧しさこそ病いの根本的な原因だというわけである。確かに一般的に考えても貧しさは病氣の病因としてあげられることが多いだろう。そこから社会の病理を追究することもできよう。しかし子規は社会を問題にはしなかつた。それはあくまで自分の貧しさなのである（その点に啄木との違いもある）。

以上が子規が病氣という「罪」を犯した——病気になつた原因として子規が挙げているものである。医学的にみれば結核になつたのはその菌に感染したからであり、結核菌を保有している人と接触したからだということであろう。又、その感染が発病に結びついたのは、子規の場合抵抗力が弱かつたということになろう。このような医学的・自然科学的な病因論に対し子規の病因論は子規個人の経験を半ば強引にその病気に結びつけたもので悪ふざけに近い。しかし、一面ではそれは、愉快に語られた個人史の試みであり実体験の真実が踏まえられてゐる。

一般的に言って人が死を意識せざるをえないような重大な病気になつた時、誰でも自分の生活を振り返るものである。病気は人にそれ迄の自分の生き方を反省させる契機となる。働きすぎた人は病気を通して休むことの意義を

知る。自分の健康にうぬぼれ暴飲暴食の慎みのない生活をしていた人は、はじめて自分の体もそんなに頑健でないと知る：病気は多くの場合、深い内省とそこから新しい生き方を生み出す契機ともなるものである。病者は病気という、辛い苦しい体験を通して過去の自分を見つめ、これからの自分の生き方を考えずにはいられないものである。その多くはまじめな、切実な自問自答であり、悲しみや寂しさ、苦しい、つらい思いを内に秘めた情念と結びついている。それに対して、子規の、この「肺病」（死病）宣告を受けて書かれた文章は、きわめて特異なものである。子規とても自分の生涯の十字架として自分を苦しめ続けるかもしれない病いについてまじめに思い悩まなかつたわけではない。結核になつて自分の人生に暗澹たる思いを抱かなかつたわけではない。だが子規にとって、文学とはその暗い思いをそのまま書くということではなかつた。「啼血始末」を書かせたのは、子規の文学意識であり、その文学意識によれば病苦や死の宣告までも笑いの材料とする、ということであり、弱つても弱音を吐かない強がり、負け惜しみを示すことであつた。だから病気にかかつた原因が、己れの過去を語りつつも駄洒落交じりの冗舌と化し、「肺病」になつた理由が半ば冗談まじりのユーモアのうちに語られるのである。

病気がいかなる点で罪であるのか、それを分析する筆も同じようにして、本来なら深刻な内容が、笑いを誘う筆づかいで書かれている。検事である赤鬼が、病気という罪を犯した被告子規に対してその罪状を列挙する。一般的に言えば罪とは「社会の規範・風俗・道徳などに反した悪行・過失・災禍など又その行いによって受ける罰」（広辞苑）である。罪の根底には利己主義——自分だけの快樂とか損得——があり、その利己主義の結果として他者に害を及ぼす、苦しめる行為（悪行）である。自ら意図せずして他者に害を与えたり苦しめたりすることは過失として同じ行為でも軽く扱われる。又、地震とか天候不順による飢饉のようなものは一般には罪に含められないであろうが、時として人間の罪に対する神の罰と解釈されることもある。このように罪という言葉は道徳的なレベルから法律的

なレベル、そして宗教的なレベルに至るまで様々な意味で使われている。病気を一般的に言つて罪と考えられないのは、それが行為ではなく、又本人自身何ら益するところなく苦しむばかりだからであり、特定の個人に対する惡意など全く存在しないからである。病気はむしろ「罰」と考えられることが多い。病気を罰だとする見方は古くからあつたし、現在でも影響力をもつてゐると思われる。たとえばエイズを性のモラルが乱れた結果に対する处罚であるなどと考へるのはその典型である。又、タバコを吸いすぎた罰として肺癌になつた、などという解釈も病気を罰と見る見方で、科学的な因果関係を生活的なレベルで見たものであろう。病気は自ら望まない、外から来る苦痛であるから、その点で罰に似ている。英語の「pain」（苦痛）という言葉も元来は処罰ということから転じたものだと言われている。

病気を罪だとか罰だとか解釈するのは一見して馬鹿馬鹿しいことのように思われるかもしれないが、その解釈の結果は、治療法とか、その人の生き方と結びついている点で深い意味がある。罪とか罰という見方は、局所的に身体のどの部分が悪いと特定の箇所を問題にするのではなく全人的に生き方、モラルを問う契機にもなる可能性をはらんでもいる。そして重い病いの場合、病いを生きる価値観が作られることなしに、その病いを生きることはできないようにも思われる。病苦にあつて、人間は苦惱しつつ考へる。それは苦しみに対して広い意味での倫理的解決を求める心の表われである。子規が病気を罪と見立てたのは、戯作者流の遊びであったが、病苦とバランスをとつて、精神的な健康を保とうとする試みとも見える。病気を罪と見たてるのは、きわめて特異な見方であつて、「啼血始末」はその趣向の面白さをねらつたものである。一体、「肺患」の病者にはどのような「罪」があるのか。子規の言うところを聞いてみよう。

「肺患」の病人は第一に「不孝」「不慈」（子をいつくしむ情）という「道徳上」の罪がある。なぜならそのた

めに「家を興^{おこ}し亡父の名」をあげることもできず、母を安心させることもできず、子孫をもてば遺伝によつて害を与えるからだという。「肺患」を遺伝と捉えるのは科学的には間違いであろうが、重い病いを患うことは両親や子孫にとつての負担であるということは、いつの世にあつても変わりないことである。しかし、それを罪といふのはいかにも強引である。病者自身の苦しみや悩みが一切問題にされていないし、病気はその人間の意図的な行為によるものでないからである。子規はそれを問題にせず、病気＝人に迷惑をかけるもの、社会にプラスにならないものの、という視点で書いているわけである。又病気のため家を興し、父の名を挙げる——ここには、いかにも明治的な価値観、家父長的な価値観の反映がある——ことができないからと言ってそれを「罪」とするのも強引すぎる。「啼血始末」は明治二十二年に書かれたものだが、明治二十八年、従軍記者として中国に渡り、帰国の途上大喀血をして危篤状態に陥りかろうじて助かって故郷の松山に帰った時、父の墓をもうでた。その時新体詩「父の墓」を作つている。この詩は「父上許したまひてよ、われは不幸の子なりけり」「残りたまひし母君をせめて慰めまつらんと思ひしそれさへあだなりき。学問はまだ成らざるに病魔はげしく我を攻む」と歌つてゐる。「啼血始末」の中で己れの罪を断罪したのは一種の強がりであつて、この新体詩の方に病いに冒された己れを悲しむ気持ちが素直に表現されている。「啼血始末」の強がりとこの新体詩が対照的なのは必ずしも病状の悪化のためばかりではなく、漢戯作と詩の発想法の違いも示していよう。

病人を罪とする第二の理由は、病氣ゆえに「哲理」を窮めることもできないし、又窮めたとしてもそれを「応用」できないからだという。この「哲学上」の罪というのは、全く一般性を欠くものであつて赤鬼の求刑に対しても、被告子規は「哲理上の罪人との御一言はどうしても受け取れかねます。哲学上人間の義務が分りておれば伺ひたくござります」と反論している。哲学上の罪などというのを考えるのは要するに遊びといつてよいのだがそこには子

規自身の好みが反映している。「啼血始末」を書いた翌年、子規は文科大学の哲学科に入学しており、この時期に哲学への強い関心をもっていた。従って、この理由づけは肺病になつたと知つた時、今自分の一番やりたい哲学の勉強もできなくなるということを、ひねくれた、おどけたユーモアのうちに包んだものとみることができよう。

第三に、病人は兵役につき、「國英を現はす」ことができず、「國民の義務」を果たさないという点からみても罪であるという。懲役令が発令されたのは明治六年のことである。「富國強兵」は明治政府のスローガンであった。兵役につけないということは、一人前の男子でないということであり国家にも受け入れられないものとして役立たずの思いを深くするものであつたろう。明治二十八年、子規が病いの身を侵しても日清戦争の従軍記者として中国に渡つたという無謀な行為の背景には、子規の国家意識があつたと考えられる。「兵役につけない」ということの重みは大きい。それは「國家」から疎外されることを意味する。現代日本人の国家意識との違いがここにはある。

第四に病人は「殖業」（職業）はできず「興業」（事業を興す）こともできないから、「國家の經濟」からみて罪である。赤鬼はこれを「所謂穀潰いわゆるごくつぶしとなるは禽獸おとにも劣りし者なり」と口をきわめて断定している。確かに病者は職業生活をまともに営めないことも多く、社会からみたら「役立たず」とか「困り者」と言えるかもしけない。ナチスの医学は社会的・政治的な観点からこの考えを徹底的に推し進めたものである。いたわり、愛情を基盤とする社会では、そのような考えは非人道的なこととして退けられる。だが、事実の問題として病者は社会的な無能者となる可能性も高いと一般的には考えられよう。しかし、子規がここで言うのは他の病人でない。徹底的に自分自身のことなのである。

それではここに本当に子規自身に病者ゆえの無力感なり、疎外感、絶望感があるのであらうか。「啼血始末」を書

いている頃の子規は大学予備門の「書生」であり、病人として入院して社会から引っこんでしまったわけではない。翌年には文科大学に入学し、後、大学を中退したとは言え、病気のためではなく正規の学業に対する怠慢によるものである。中退後「日本」新聞社に入社し日本新聞社員として活動しているわけで、病者子規はその後も決して社会的な無能力者として疎外されて生きたわけではない。病者子規は、この文章を書いた時も、そしてますます病いの重くなつた時も社会的な無力感・疎外感などと無縁な人生を送つてているのである。

第五に、病気が罪であるのは「進化の世界」である「今日の世界」にあって「害を後世に残す」のはこの「規則に反する」「退化」だからだという。明治をもつて日本の近代は始まる。その近代社会を特色づけるのは「進歩」の観念であり、その現われとしてのめまぐるしい環境の変化であろう。わけても日本の近代は、欧米の文明を日本の伝統の上に「接木」したものであり、「文明開化」は明治の国家のスローガンであった。それは皮相な欧米の模倣という面はあつたにせよ、いやおうなしに「世界」に参加した日本の宿命だった。そこでは単純に「進歩」は善であり、「立身出世」という言葉は、それを個人の生き方と結びつけるものであつた。子規は松山中学校在学中、十五、六のころ、自由民権運動に強く魅かれ、仲間と「自由民権雑話」を発行したり、演説に熱中したりしている。これはその鋭い時代感覚を反映するものであつて、十六才で松山中学を退学して、東京に遊学したのは、その底に、東京という最も進んだ世界に出て、日本の「進化」——一般的な言葉で言えば「開化」——の原動力になりたいというやみがたい憧れにつき動かされてのことである。そのような立身出世の夢があるだけに、死に至る病いのもたらす挫折感は深いはずである。しかし「肺病」がもたらすのはそのような個人の夢の挫折だけでもなく、「進化」する世界に一人取り残される疎外感だけでもない。それどころか社会の足手まといになり、邪魔者となり、害しか与えない存在になるということである。子規はそのような病者としての自分を「穀潰し」^{ごくつぶ}だと言つてゐるわけ

である。

病者子規はこのように社会的に全く貢献のできない「穀潰し」であつたか——繰り返しになるが、決してそうではなかつた。「穀潰し」になるのは、将来の可能性、将来の恐れであつて、今現在の子規がそうであるということではない。これは「啼血始末」の重要な点である。子規はなるほど病者ではあつた。だが病者の罪として列挙されることは、そのほとんどが、今現在子規の冒している罪ではなく、これから可能性として考えられることなのである。子規は未来の己れの姿を誇張化してユーモラスにののしることによって、逆にむしろ、病者らしくない、たくましい精神を己れのうちに育てていつた。社会的な役割を喪失し、無価値な生を生きねばならない病者としての未来を想像することが、逆に病者としての別な生き方を模索する道にもつながつていつた。子規にとって書くことは己れの姿を写すことでなく、デフォルメといえるまでに戯画化する想像力を働かせることであつた。私達はここで文学を遊びと考える漢戯作的な手法のもつ役割を再認識する必要があろう。「写実」は必ずしも「戯作」以上に価値があるわけではない。少くとも病者子規にとって、それは病いを乗り越えて生きる生の一工夫であつた。病者としての自己を口汚くののしり、その罪を責めることによつて子規は逆に病氣に立ち向かう決意を内に固めていた。「啼血始末」には、おかしみのうちに子規のなみなみならぬ負けじ魂が潜んでいるのである。

結果からみると、子規は病者であるにもかかわらず以上挙げた五つの「罪」を犯すことなしに生きたと言える。親の名を高からしめ、一門の誇りとなり、故郷松山の誇りとなり職業をもち、俳句・短歌などの「事業」を興し、文学の「近代」化を推し進めた。病氣という「罪」は子規にあつて逆転している。子規の生涯と文学の秘密は病いという「負」を「正」に転じたその逆転にあると言えよう。

(3) 「子規子」—「読書弁」について

「読書弁」の「弁」とは「弁明」「弁論」の「弁」で「論ずる」「論争する」の意味である。つまりこれは子規の「読書論」とも言えるものである。

その自序をみると「出師表」は主君のため、「陳情表」は親のために書いたもので、前者には「忠」、後者には「孝」の精神が表われているのに対し「読書弁」はわが身のために作ったのであるから「得手勝手」ではあるが、「情」に基づいている点では三作とも共通しているという。そして又、「情」を説くだけでなく「情の理」を説いている点に「出師表」「陳情表」と「読書弁」との違い、千年前の古典と現代の作品との違いがあるとも述べている。

「出師表」は蜀漢の諸葛亮が、劉備没後、魏を討つために出陣する時、後主劉禅に奉った上奏文、「陳情表」は武帝が太子普の洗馬（太子に奉仕する官名）に任じようとした時、祖母の劉氏が九十余才で、これを世話をするとがいないと慎んで辞退した上奏文（作者は普の李密）と共に古来名文として並び称されてきたものである。この二つの名文に対抗して書かれた「読書弁」は「忠」「孝」の道義など欠如した自分勝手で、わがままな考えを盛りこんだ作品ではあるが、感情を正直率直に述べている点においては共通しており、「読書弁」にあっては感情を理論的に分析し、道理を立てて書いている点に特色があるというわけである。内容としてはこれも漢戯作といつてよいもので論理的な、哲学的文章と見えながら戯作的な遊びの精神のあふれた単純明快な愉快な作品である。しかし、これを単に馬鹿馬鹿しいと言うことができないのは、子規も書いているように、正直率直な感情を理をもつて述べたというばかりでなく、子規の人生に対する基本的な姿勢が伺われるからである。「読書弁」は題からすれば、「読書論」なのだが、「人生論」であり、もつとはつきり言えば病者である自分がどう生きるのか、その「決意」

を語った文章である。

具体的にこれを見てみよう。子規はまず、読書を論ずるにあたって、人間の「欲」は人それぞれによって何に対しして欲を感じるか内容こそ違え、大体一定しているという。それを百斤（斤は尺貫法の重さの単位で、一斤は百六十匁、六百グラムにあたる）とすれば甲の場合、色欲六十斤、修飾欲三十斤、その他雜欲十斤、乙の場合読書欲七十斤、食欲十五斤、その他雜欲十五斤、という具合に。そしてある欲が増えれば、ある欲は減りその総量は常に百斤とみられるという。これはおそらく質量不変の法則のような科学的知識をパロディ化して人間の欲にあてはめたものであろう。「読書弁」の結びは「ここに消えかしこにできて物質のへりもせすまた加はりもせず」という狂歌で結んでいる。表面的には増えたり減ったりしているように見えていながら物質の質量が常に一定であるように、人間の「欲」の総量も一定だという「仮説」から出発する。そしてさき程あげた甲は、いわゆる「放蕩書生」の類、乙は「勉強家」の類であろうと、まず一般的なことを述べ、次に、自分の場合がどうであるかと言えば乙の類だという。ここに至つて読者は乙の例は子規が自らの欲を言うために出したことがわかる。「勉強家」にとって「食欲」が大きな欲になるとは一般には考えにくいが、子規その人にとってはめでみればまさに本を読むことと食べることは、若いころからの二大欲望であった。このことについては漱石はじめ数多くの証言があり、子規自身も勿論、自覚し、自認していた。してみると「読書欲七十斤」「食欲十五斤」とは若い子規の欲望・関心のありかを具体的に示す表現と言つてよい。読書家にあつては食欲など低次元のものとして抑えられることが多い。「肥った豚よりやせたソクラテス」などという言葉はそれを示してもいよう。しかし、子規は「読書しながら食べた」人であり、読書について大きな関心をもつていたのは食べるすことであった。子規の面白さは精神的なものと肉体的なものが、この読書と食欲という形をとつて結びついている点にある。よく読書すると共によく食べたのが子規だった。

「仰臥漫録」には、それが奇形的とも言えるアリズムをもつて記されることになる。その意味でも二十二才の自己の欲望分析は興味深い。

欲望全体を「百」とした時、自分にとってその「七十」を占める「読書欲」とはどのようなものであったのか。ここで子規は自分の幼少期を振り返って、昔から読書が好きだったわけではなく祖父などに強いられて無理やり読ませられ、いや／＼ながらも学校に行かせられたから、その「習慣」のために読書を好むようになつたという。母八重の父は藩儒大原觀山で、子規は六才の時から觀山の私塾へ通い、漢文の素読を始めていた。小学校に入学しても、学校とは別に漢学・漢詩を学んだのは、子規自身の自発的な意志というより、母や周囲の強制もあつたであろう。「翁に孟子の素読を学ぶ時なりけん。翁は自分に向ふて余の幼時は汝の如く不勉強にはあらざりしよと宣ひたるを八、九才の子供心にも記憶し居れり」と「読書弁」の中で記している。読書という外からの強制力で始まつたものが、繰り返されるうちに習慣化し自分の主たる「欲」になつたと子規はいう。しかし、そのような外からの強制力が、内的な動機づけになる契機があつた。それは子規の内なる「多情」である。「多情」とは何か——ここで子規は、人間の欲は一定であるという最初の「仮説」を修正し「各人の欲の分量は大方同じけれども、どうも多少はその分量を異にするが如し。その多き者を多情の人と言ひ、少き者を白癡の人といふ」と述べる。「白癡」というのは「白痴」と同じだがこの場合は「多情」と対比される言葉であつて普通いわれる「白癡」とは意味が異なる。子規は次のように書いている。

「読書よりはおのが氣隨きままに遊びて暮すを好ましく思へども何分貧家に生れ一文の金も贅沢には消費得ざる身分なれば思ふ様に遊ぶこと能はず。しかしながら多情（多欲といふ事も同じなり）の生れとて、このまま朽ち果てんは我が本意にあらず。さればいかにして暮さんやといふに読書して名を挙ぐる一事なりき」

つまり読書より遊びが好きであったのに「多情の生れ」であったから「このまま朽ち果てん」ことは自分の「本意」でない。だから「読書して名を挙げ」たいと考えたというのである。ここでわかるように「多情」とは世間的な欲望、名誉心、功名心ということである。そして読書するのは自分のこの「多情」なる性質のためで、貧乏人でも名を挙げられる手段として読書を重視するようになつたというのである。結論として言うなら、子規にとって読書とは功名心と結びつくものであり、それによって、立身出世するための手段であったということになる。ここに明治という近代日本の創草期を生きた人間の価値観を伺うことができよう。

子規の読書論は次に、自分の病気の問題と関連づけて述べられる。即ち、読書の結果として「脳病」か「肺病」になるのは承知だが、これを排するわけにはいかない。自分が「肺病」となつたのは意外のことであるが、考えてみれば、これはちょっと早く来ただけのことであつて驚くに足らない。病気になつて惜しまれるのは長く生きないため多くの本を読めないことであつて、命が惜しいのではなく、読書できぬことが惜しいのだ、と言うのである。ここで子規の言う「読書」とは単に書を読むということではなく、「読むことと書くこと」である。子規は高らかに宣言している。自分の一生の目的は「一巻も多く読み一枚も多く著すこと」である。これが「読書弁」の主題である。

それがなぜ「得手勝手な」わがままな宣言と言えるのか、と言えば「近欲に迷ふて一刻も早く書を読み」たいがためである。「近欲」とは子規の造語であろうがいかにも子規らしい言い方であつて、長い先のことなど考えず、健康のことなど考えず、目先のやりたいことをやるのだという決意、性急な思いを言ったものである。読書の結果肺病・脳病となり、自分の生命が犠牲になり家族に迷惑をかけるかもしれない。しかし自分にとつて病気のことなどより「読書」の方が大事であり、あとでなどといわず今現在やりたいことをやって生きる、即ち「読書」に生き

る、この点で、わがままな「感情の理論」だ、と言うのである。子規は「仰臥漫録」の中で自分の生涯を野心にかられた生き急ぎの人生だと振り返っているが、この「読書弁」には若い子規の人生に対する基本的な姿勢・覚悟がユーモラスに、みずみずしく、率直に語られているのである。以後の子規の人生を考える時「肺病」からくる短命の意識と「読書」に自らを賭けようとする野心は様々な変奏を奏でながらも、その生き方を定める二つの重大な要素であつたことを知るのである。

主な参考文献

- 「聖書と医学」 パウル・トゥルニエ著赤星進訳 聖文社
- 「子規全集」 講談社
- 「正岡子規」 新潮日本文学アルバム 新潮社
- 「子規山脈」 坪内稔典 NHK市民大学
- 「正岡子規」 岡井隆 築摩書房

(注) 本稿をなすにあたって、結核、脊椎カリエス等の病気について古館伝三郎医師(岩手県一戸町)より御教示頂いた。記して感謝申しあげる。